

# 近代における茶の湯家元と天皇との距離

## ——天皇・皇族への献茶にみる家元の社会的地位の向上——

廣田吉崇

### I 二つの茶の湯文化の存在とその消長

#### 1 歴史上の家元イメージのひずみ

千利休以降の茶の湯の歴史においては、流派という問題が重要となってくる。そして、この流派と密接に関係しているのが家元の存在である。ところで、茶の湯の問題を歴史的に検討する場合、現在の流派あるいは家元のあり方を前提として論じていることはないだろうか。その原因として二つのことが考えられる。もちろん、過去の流派あるいは家元のあり方に関する研究があまり進んでいないことが一つである。そして、もう一つは、茶の湯のそれぞれの流派が語る「お流儀の歴史」である。そこでは、流祖以来代々の家元が同じような比重で取り扱われている。そのような「語り」によって、家元という存在が静的にとらえられ、家元のあり方の変遷という動

的な現実が理解されにくいのである。

本稿では、家元制度が成立したとされる近世中期<sup>①</sup>と、家元を具体的にイメージすることができる現代との間、すなわち、幕末をふくむ近代において、家元のあり方がどのように推移してきたのかを考察する。

#### 2 近世における「大名茶」と「わび茶」

近世の茶の湯には、二つの意義が存在した。一つは武家の儀礼としての茶の湯である。これは第二代將軍徳川秀忠、第三代將軍徳川家光の時代におこなわれた、將軍が大名邸を訪問する行事の中心に茶の湯が位置付けられる「数寄屋御成」<sup>②</sup>に象徴されている。その後、数寄屋御成は衰退したが、近世初期以来の名物茶道具の献上と下賜、および、その所有が武家社会の秩序形成に重要な意味をもちつ

づけるなど<sup>(3)</sup>、武家にとって、茶の湯の知識や技芸は不可欠な教養であった。もう一つの意義は趣味としての茶の湯である。武家や上流町人が茶の湯を楽しんだことはもちろん、近世における町人農民層の成長とともに、より広範な層に茶の湯が受け入れられた。

このような状況から、近世における茶の湯の歴史について、「大名茶」あるいは「武家茶」という武家層の茶の湯と、「わび茶」という町人層の茶の湯とが、二元的に存在していたように考えられている。<sup>(4)</sup>ここで「わび茶」という言葉が具体的にさし示すものは、千家流や藪内流などの茶の湯である。これらの流派では、近世中期に、完全相伝制から不完全相伝制に移行し、世襲制の家元を頂点として、中間教授層と多数の門弟からなるヒエラルキーを形成する家元制度<sup>(5)</sup>、すなわち、「近世家元システム」を実現した。

しかし、近世前期に武家の茶の湯をつかさどる大名家家臣としての「茶堂」の地位を獲得した千家は、近世中期以降、富裕町人農民層に勢力を拡大していく過程においても、その立場を放棄したわけではない。茶の湯における「近世家元システム」の実態は、新たな経済基盤としての富裕町人農民層と、従来からの権威基盤および経済基盤としての武家層との両方に立脚するという二重構造であった。すなわち、前者からは家元としての教授料、伝授料の収入があり、後者からは武家の格式と扶持を得ていた。この二重構造によって安定的な地位を確保していたのが近世の千家家元の姿である。

それとは別に、遠州流や石州流などが広まった武家層において、「大名茶」あるいは「武家茶」とよぶべき武家層の茶の湯が存在していた。そこでは、特色ある茶の湯指導者がみられるものの、その技芸を「茶堂」が伝承するという形態をとり、「家元」のような世襲の茶の湯指導者は、ついぞ誕生しなかった。この点が、「わび茶」との大きなちがいである。結果的に武家層の茶の湯では、茶の湯の技芸を教える側の統制力が弱く、教えられる側の個性が強調される傾向にあった。

なお、大名家に茶の湯の技芸をもって仕えていた側面に着目すれば、千家にしても、武家層の茶の湯の一翼を担っていたといえる。ただし、それは、大名家における職業的茶の湯技芸者としての「茶堂」であり、茶の湯指導者たる「家元」としての立場ではないことに注意しなければならない。

### 3 近代における「貴紳の茶の湯」と「流儀の茶の湯」

このような「大名茶」と「わび茶」という、異質な二つの茶の湯文化の併存状況は、近代にも引きつがれたといってもよいだろう。文明開化の風潮のなかで衰退した茶の湯の復興を主導したのは、旧大名、近世からの豪商にくわえて、新たに台頭した維新の功臣、財閥関係者らの、「近代数寄者」とよばれる人々である。彼らの茶の湯を「貴紳の茶の湯」<sup>(6)</sup>とよぶこととする。一方、「わび茶」を標榜

する家元の茶の湯は、すでに幕末に近代を準備するかのとき動きがみられたが、明治維新以降しばらく低迷期をむかえ、その後、広く庶民層を対象に発展していくこととなる。これは、家元を中心とし、流儀の茶の湯の技芸の習得を重視することから、「流儀の茶の湯」とよぶこととする。

「貴紳の茶の湯」の茶人たちは、家元の教えを受けて茶の湯を実践するというよりも、自らの趣味によって独自の茶の湯を楽しむという特徴があった。<sup>⑦</sup>これらの茶人たちが、室町時代以来の、將軍、大名、豪商などが秘蔵した茶道具を入手し、それを用いて茶会を催したことが端的に示すように、彼らの茶の湯は「大名茶」の伝統を受けつづものであった。彼らの目には、しよせん家元も、職業的茶の湯技芸者<sup>⑧</sup>にすぎなかった。

しかし、このような「貴紳の茶の湯」は、第二次世界大戦後の民主化改革を契機にほぼ解体し、それ以降は社会的影響力を失う。そして、「流儀の茶の湯」全盛の時代へと推移することとなる。現在では「流儀の茶の湯」しか存在していないので、「貴紳の茶の湯」を理解することはむづかしい。財力にまかせて高価な茶道具を買い集めるという人物ならば、今日でもないわけではないが、家元との関係でいうならば、彼らも「流儀の茶の湯」の枠内にとどまっている。現在の家元は、点前という技芸を総轄するだけではない。家元の「好み」と称して茶道具の選択という美意識の面にまで大きな

影響力をおよぼしているのである。家元がこのような「絶対的な」茶の湯指導者であるという状況は、第二次世界大戦後にはじまるものであることを認識する必要がある。

#### 4 指標としての「天皇との距離」

近世から第二次世界大戦までの間、併存していた二つの茶の湯文化、すなわち、「大名茶」から「貴紳の茶の湯」へと継承されたもの、それに対して、実質的には近世中期にはじまる「わび茶」から「流儀の茶の湯」へと展開したもの、この二つの茶の湯文化の消長を通じて、おもに近代の家元のあり方を論じるのが本稿の目的である。その際に、家元の社会的地位の変化を示すために、「天皇との距離」を指標とする。

この「天皇との距離」という指標には、二つのレベルがある。第一のレベルは、象徴的にいえば、天皇が芸能を鑑賞する「天覧」<sup>⑨</sup>である。明治維新による文明開化の風潮のなかで、日本の芸能文化は、旧弊なものとしていったん見捨てられることとなる。その復興の過程において、天皇制システムによって認知される「天覧」という行事が重要な契機となる事例がみられる。ここでは、上下関係を前提とした「みる・みられる」という関係での「天皇との距離」である。

このようなレベルで「天皇との距離」を論じる場合もあるが、こ

のレベルの一段上には、家元の社会的地位が向上するにつれて、天皇から個人として認識される関係がありうる。すなわち、対等な交際関係を前提とした「天皇との距離」である。この第二のレベルにおいて、現在の家元と皇室との関係は、昭和五十八年（一九八三）に当時の裏千家千政之若宗匠（現在の第十六代千宗室（坐忘斎）と三笠宮容子内親王との結婚が示すように、きわめて親密であるといつてよい。図1に示すとおり、これは表千家側からみても、三笠宮家とは、直接ではないが姻戚関係となっている。このような家元と皇室との通婚を通じて、現在では、家元にとって「天皇との距離」は、ごく近いものとなっている。本稿では、このような二段階のレベルにおいて、皇族をも視野に入れた「天皇との距離」を指標とする。

本稿の構成をあらかじめのべると、Ⅱにおいて、まず近代の前提たる幕末の事例における「天皇との距離」を説明し、そこにみられる家元の「天皇への志向性」を確認する。ついで、Ⅲ1および2、Ⅳ、Ⅴにおいて、それぞれ明治期、大正・昭和初期、昭和戦後期の「流儀の茶の湯」におけるいくつかの特徴的な事例を紹介し、「天皇との距離」の状態、あるいは「貴紳の茶の湯」との関係をもることにより、家元の社会的地位が変化していく状況、そして、家元を中心とする「流儀の茶の湯」の勢力が拡大していく状況を検証する。なお、この時期にもっとも象徴的な動きをみせたのは裏千家である。

と考えられる。本稿では、資料の制約から裏千家の事例を中心にあつかうが、適宜他の流派における並行した現象にもふれることとする。

一方、Ⅲ3においては、「貴紳の茶の湯」を代表するものとして近代の松浦家の茶の湯をとりあげ、そこにみられる「流儀の茶の湯」との関係や「天皇との距離」の異なる状況について確認する。

これらの検討を通じて、近代の茶の湯における家元システムがどのように発展していったのか、その過程を明らかにする。

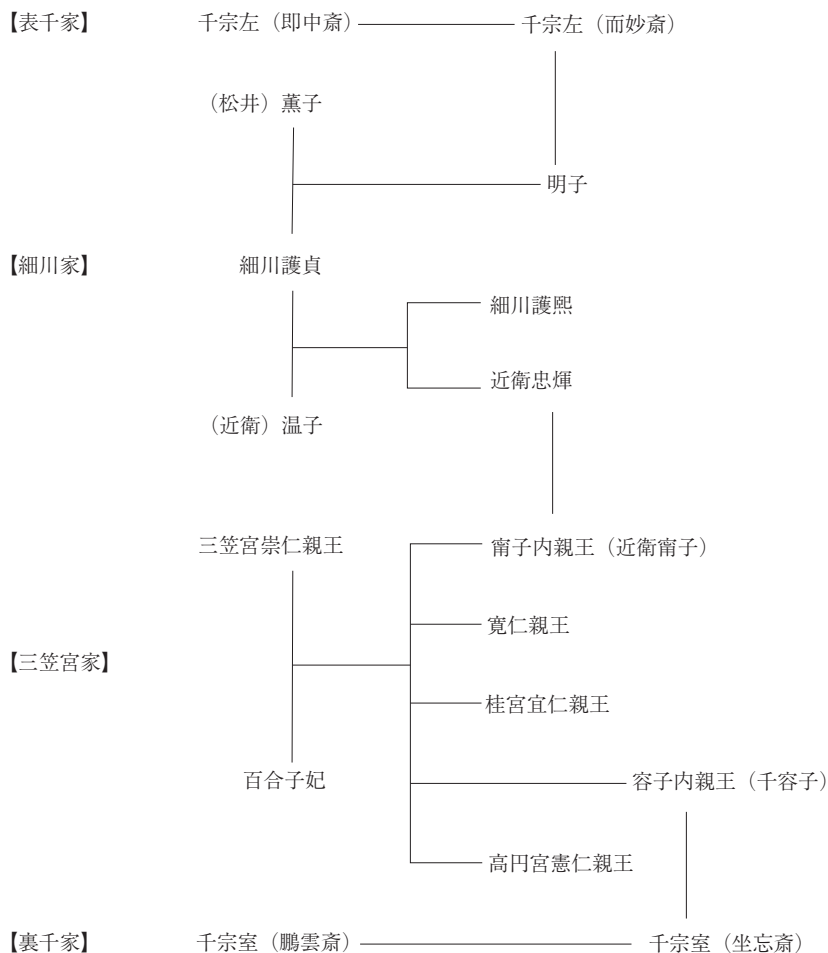
## Ⅱ 前近代における茶の湯と天皇——千家にみる「天皇への志向性」の系譜——

### 1 「天皇への志向性」の源流としての禁中茶会

茶の湯の歴史上、天皇との関係でもっとも大きなできごとといえば、天正十三年（一五八五）の豊臣秀吉による「禁中茶会」である。

この茶会は、千利休が利休居士号の勅賜を受け、参内したという意味で、千家にとっても重要であり、そもそも「千利休」という呼称もこのときにはじまるとされている。もちろん、この茶会は豊臣秀吉の政治的意図によるものであるが、茶の湯という新しい文化が天皇に供せられることによって、権威付けがなされ、存在理由が高められるという、明治期の「天覧」と同様の機能を果たしたものと評価できる。

図1 三笠宮家と表千家・裏千家の姻戚関係を示す略系図



禁中茶会においては、正親町天皇、陽光院誠仁親王、皇太子和仁親王等に対し、豊臣秀吉自ら茶を点じて献じた。そして、天皇還御の後、公卿等には千利休が点茶した。<sup>⑩</sup>「一世の面目、これに過ぎず候」と千利休が書きのこしたとされるところ、これは、千利休のもっとも華々しい活躍の場として茶の湯関係者に記憶された。その後、この茶会は、豊臣秀吉によるものではなく、千利休による「天皇への献茶」として認識されることとなる。そして、千利休の子孫である千家にとつて、「天皇への献茶」は、流祖の偉大な事績としてみずからの権威付けに用いられ、それが一種の目標へと転化していくのである。

豊臣秀吉の政治力によってはじめて実現した「天皇への献茶」は、千家の力によって実現できるものではない。しかしながら、「天皇への献茶」という夢はともかく、「天皇との関係」という目標は、強い願望として千家に存在しつづけたのである。千利休の孫の千宗旦の時代には、後水尾天皇の中宮であった東福門院から、道具の誂えの注文があり、東福門院からの下賜品が千家に伝えら

れている<sup>(13)</sup>。このような道具の注文は、かならずしも千家に対してのみおこなわれたことではないだろう<sup>(14)</sup>。しかし、千家の歴史では、こうした「天皇との関係」は強調される一方で、政治的実権を有していた武家との関係は秘匿されてきたのである。

天保五年（一八三四）に編集された『普公茶話』のなかで、杉本普斎は、千宗旦について「將軍家より再びまで御召あれとも上意にもしたかはす<sup>(15)</sup>」と、將軍家の招聘に応じなかったことを伝え、さらにつぎのとおり述べている。

されは宗旦以後ハ、宗拙宗守宗左とて実子あり。將軍の命に宗旦しかひ給はざる時、此兄弟の人々歎きて、かやうの時節にあひ奉る事こそ幸なれ、いそぎ江府に下り給は、其余力一家の為に、なとかならさんやとて、涙を流していへとも、宗旦心に叶はず、知行に茶湯を替てよしなし、面々の茶湯器量なければ力及はず、我は一生此藪の中こそ楽なれとて、中／＼承引なく、宗旦在世の間、家貧しければ持伝へたる器を価にかへて清貧を樂めり。死後に至りて其徳子孫に残りて宗守、宗左、武家に出て仕へり。宗旦の心を以ていは、もはや茶湯は知行にかはりて道を失へり<sup>(16)</sup>

これが歴史的事実であるのかどうかは、定かではないが、このよ

うに武家への出仕をかたく拒否する千宗旦のイメージは、ながらく千家の歴史として語られてきた。現在でも、つぎのとおり、同じような考え方が一般に示されている。

江岑は家の将来を思い、父宗旦が権門に出仕しない主義をおしきって、南紀徳川家へ出仕にふみ切った。（略）寛永十九年の南龍公への出仕も宗旦は黙認したものであらう。<sup>(17)</sup>（傍線引用者）

宗旦は利休の歿後、茶の湯を通じて、公家や武家たちと交わりながらも、庶民の生活に甘んじ、諸大名からの招聘に応じようとしなかったが、それだけに日常の生活は苦しかった。しかし若い子供には、それは堪えられないことであつたし、宗旦も清貧の中に孤高の精神を守りぬくのは、自分だけでよいと思つた。そこで招聘のあるまま、二人の子供に、それぞれ大名に仕えることを許したのである。<sup>(18)</sup>（傍線引用者）

ところが、実際には、この息子たちの大名家出仕のために、千宗旦は、柳生宗矩、板倉重宗、片桐石州、永井尚政、小堀正春（小堀遠州の弟）などの幕閣、大名等に、みずから求めて積極的な接触を重ねていたのである。このことは、二百四十通あまりの千宗旦の手



紙が、昭和四十六年（一九七二）刊行の『元伯宗旦文書』（茶と美舎）において公表されたことによって明らかとなった。それは従来の千宗旦像を大きく変えるものであり、三百年のあいだ秘められていた歴史的事実が驚きをもつて迎えられた。

これらのことからわかることは、豊臣秀吉による千利休の賜死という悲劇があったとしても、千家が茶の湯を糧として生きていくためには、武家との関係は維持せざるをえない現実である。その現実をおおい隠しながら、また隠すためにも、理想としての「天皇との関係」を強調し、それによって千家の権威を高める情報操作がおこなわれたものと考えられる。

千宗旦の努力などにより、その息子たちの三家の千家は、それぞれ大名家家臣となり、安定した身分をえた。<sup>(19)</sup>しかし、それによって「天皇との距離」は遠くなってしまうこととなる。この距離が大きくなるのは、身分社会が流動化する近世末期まで待たなければならぬ。それは、裏千家第十一代千宗室（玄々斎）による「天皇への献茶」の「復活」である。

## 2 「天皇への献茶」の「復活」とその実態

裏千家第十一代千宗室（玄々斎）（文化七年（一一八〇）～明治十年（一八七七））は、三河奥殿藩主大給松平家から、裏千家第十代千宗室（認得斎）の養子として迎えられ、幕末から明治という変革期に

裏千家当主として活躍した。利休堂の再興などの裏千家の増築整備、千利休二百五十年忌法要および茶会（天保十年～十一年（一八三九～四〇））などを実現し、また、茶の湯点前を整理し、教授法の体系化を図ったとされている。<sup>(21)</sup>明治維新後の茶の湯衰退期には、茶の湯を遊芸とみなす考え方に対し、『茶道の源意』を著して反論する一方で、立礼式を考案し、新時代に即応した茶の湯をめざしたことなども知られている。このような数多くの事績のひとつとして、千宗室（玄々斎）による「天皇への献茶」の「復活」について考察する。

まず、この時期における裏千家と禁裏公家社会との関係についてみておく。千利休二百五十年忌としておこなわれた一連の茶会の初会である天保十年（一八三九）九月八日、内大臣近衛忠熙は正客として裏千家に招かれている。<sup>(22)</sup>また、嘉永二年（一八四九）閏四月二十一日および同年十一月六日には、知恩院宮尊超法親王が裏千家を訪問している。<sup>(23)</sup>さらに、東本願寺大門主達如が裏千家を訪問したことも詳細な会記から明らかである。<sup>(24)</sup>ほかにも、安政二年（一八五五）十二月十二日の前内大臣徳大寺実堅、文久元年（一八六一）二月二十六日の東本願寺門主厳如は、それぞれの別邸において裏千家と交際があったことが伝えられている。<sup>(25)</sup>このような事例から、千宗室（玄々斎）には、積極的に禁裏公家社会との交渉を深める意図があったものと考えられる。<sup>(26)</sup>

さて、本題の「天皇への献茶」である。万延元年（一八六〇）に

千宗室（玄々斎）は、つぎの口上書を提出している。

乍恐以先例奉願上口上書

私先祖

千利休宗易儀

天正十三年九月居士号 降賜同年十月七日於

小御所

正親町院様

後陽成院様<sup>江</sup> 献茶仕<sup>并</sup> 御茶器 御用相蒙候儀且

後陽成院様御宸翰御色紙拝領仕難有秘藏仕居候事

宗旦

寛永年間始<sup>ヨリ</sup>

後水尾院様 東福門院様<sup>江</sup> 度々 献茶仕候儀 御茶器御用<sup>毛</sup> 相蒙

尚御品々拝領仕難有秘藏仕居候事

宗室

寛永十一年<sup>ヨリ</sup> 同十六年迄

年頭八朔茶服紗献上之仕候

宗室

寛延二年<sup>ヨリ</sup> 宝暦三年迄年頭八朔

御濃茶御茶杓<sup>等</sup> 献上之仕候

宝暦四年日記類委細<sup>ニ</sup> 無御座候間 献上物中絶之儀相分<sup>リ</sup> 兼候

其後<sup>家統幼少ニ付</sup> 無扨献上不仕候義<sup>与</sup> 奉存候 依之今度末世下賤

ノ私 恐多候得<sup>共</sup> 御濃茶献上之儀奉歎願候 何卒相叶候ハ、

対先代<sup>共</sup> 且 流儀之面目不過之冥加至極 難有仕合奉存候 敬

白

万延元年<sup>申</sup> 十二月廿日

千精中宗室（花押）<sup>㊦</sup>

千宗室（玄々斎）は、千利休の献茶をはじめ、裏千家が数代にわたり「献茶」または「茶献上」をおこなった先例をのべ、「茶献上」の復活を願い出たのである。この願いは、つぎのとおり慶応元年（二八六五）に認められた。

右先例ヲ以 献茶再興奉願候処 慶応元丑年六月 中院家ヲ

以 御聞濟被仰出候ニ付 則同年八朔ヨリ去<sup>リ</sup> 己年迄毎年春秋

献上候 左ノ通り

御濃茶 銘龍之影 木地中次二納メ一箱

御茶杓 白竹真削共筒 宗室作一箱<sup>㊦</sup>

また、慶応二年（一八六六）一月十九日には、この「茶献上」を記念する茶会がおこなわれ、この際に「大居士古書ニヨリ」和巾点の点前が復興されたのである。<sup>㊦</sup>

そこで、これらの意味について考えてみる。まず、口上書の記載



内容がすべて歴史的事実であるのかどうかは定かではなく、否定的に考えたい。<sup>(30)</sup> そもそも、よく知られている天正十三年（一五八五）の禁中茶会についても、

正親町天皇や皇太子への献茶の御茶頭は、関白秀吉がつとめ、天皇らが還御されてのち、小御所の端の御座敷で公卿衆に茶をすすめたときは、千宗易が利休居士と号して、茶頭役をつとめ、台子を用いての茶儀を行なったのである。したがって、秀吉が天皇らに献茶した際に、利休居士は、後見役として、次の間に控えていたらしく思われる。<sup>(31)</sup>

と考えられており、口上書では「豊臣秀吉の献茶」を「千利休の献茶」とおきかえていることがわかる。

なお、注意すべきことは、千宗室（玄々斎）による「天皇への献茶」は、天正十三年の「禁中茶会」の再現ではないことである。禁中茶会とは、禁中で抹茶を点て、それを天皇が飲むことである。それに対して、千宗室（玄々斎）が行ったことは、人を介して固体の茶を天皇に贈呈したことである。このことは、口上書において千宗室（玄々斎）が「献茶」と「献上」とを明確に区別しているように、<sup>(32)</sup> 本来は「天皇への茶献上」とすべきである。<sup>(33)</sup>

さて、熊倉功夫は、このことについて、つぎのとおり評価してい

る。

これほど玄々斎が禁裏にこだわった理由はなにか。文久・慶応段階の政治過程を思いうかべるまでもなく、すでに幕府は崩壊の危機にあった。玄々斎の胸中には、天皇とそれを支える公家文化のなかに、将来の家元制がはつきりと描かれていたのではなかったか。徳川将軍を頂点とする幕藩体制は、もはや家元制のあるべき姿を示すものではなくなっていた。天皇制のあらたなる登場を前に、その「不朽なる権威」こそ、家元が本来的に追求する機能の理想をそなえたものであることを、玄々斎は知覚していたのである。<sup>(34)</sup>

天皇制に家元の機能の理想をみるという指摘は、まさにそのとおりであろう。そして、天皇という権威を有効に活用したことも認められる。しかし、徳川家の一族である大給松平家の血を受け、裏千家代々と同じく伊予松山藩久松松平家に茶堂として仕え、尾張徳川家にも出仕した千宗室（玄々斎）に、万延元年（一八六〇）十二月といえば公武合体による和宮降嫁という動きのなかで、王政復古を予見して、武家から天皇へと、よるべき権威を変更しようという意図までがあったのかどうかは疑問である。Ⅲ2においてくわしくのべるとおり、明治維新以降も、ある意味では昭和二十年（一九四五）

まで、千家家元は旧主に対して旧家臣としての立場をとりつづけるのである。

では、千宗室（玄々斎）の「禁裏へのこだわり」はどのように解すべきであろうか。富裕町人農民層にも支持基盤を広げ、流儀というヒエラルキーを形成し、近世家元システムを完成させた家元が、近世末期に至って、さらなる上昇を志向する動きであると考えられる。それは偉大な流祖千利休の業績に近づくこと、その象徴が「天皇への献茶」なのである。

すでに千宗室（玄々斎）の口上書には、歴史的事実をこえて、「天皇への献茶」イメージが増幅している。そして、千宗室（玄々斎）は、「天皇への茶献上」によって、すくなくとも「天皇との関係」を復活させることに成功する。さらに、それを記念して、千利休がおこなっていたとする「和巾点」という点前を、復興と称して創作し、それを教え広める。このようにして、慶応元年（一八六五）の「天皇への茶献上」に、天正十三年（一五八五）の「天皇への献茶」のイメージを重ね合わせるのである。

このことは裏千家の名誉として、門弟に対して発信されつづけていく。明治三十六年（一九〇三）に刊行された裏千家の教本『茶道浦のたまや』<sup>(35)</sup>は、一之巻の本文冒頭に「今日菴歴代考」をかかげ、裏千家代々の事績を紹介している。そのうち、「天皇との関係」に関する記述は、つぎのとおりである。

祖先 宗易、天正十三年九月 正親町上皇勅シテ居士ノ称ヲ

賜フ同年十月七日於小御所 後陽成天皇并二

正親町上皇ニ自ラ茶ヲ献ズ

三代 宗旦、寛永ノ始メ 後水尾天皇并東福門院ニ召出ダサ

レ自ラ茶ヲ点ジテ献ズルノ数度

四代 宗室、明正天皇ノ御代寛永十一年ヨリ十六年ニ至ル迄

毎歳年頭八朔之節会ニ禁中へ献茶ヲ為ス

五代 宗室、寛延二年ヨリ宝暦三年ニ至ル迄同ジク年頭八朔

ニ禁中へ献茶ヲ為ス

十一代宗室、慶応年間禁中へ茶ヲ献ジタル（傍線引用者）

これを見ると、千宗室（玄々斎）が口上書のなかで厳密に使い分けていた「献茶」と「献上」とが、ここではさらにあいまいとなり、「天皇への献茶」イメージに傾いている。

たしかに、「天皇への茶献上」が実現できたのは、千宗室（玄々斎）という個性によるところが大きい。しかし、この時期に天皇への接近を試みたのは、裏千家だけではないことは強調しておきたい。まさに千宗室（玄々斎）が禁裏へ茶献上を働きかけていた時期に、当時の孝明天皇の異母妹皇女和宮の茶の湯指南が、藪内流家元藪内紹智（竹籬）（寛政四年（一七九二）～明治二年（一八六九））に命ぜられたのである。藪内家も、京都における「わび茶」の家元として近世

家元システムを實現し、西本願寺の庇護のもとに多くの門弟を擁していた。

藪内紹智（竹筍）は、和宮への茶の湯指南に関して、書状のなかでつぎのとりのべている。

○御聞も被<sub>レ</sub>下候哉 今般公方様御興入之和宮様御方藪の内流被<sub>レ</sub>遊候御事<sub>ハ</sub>当流万世之面目<sub>ニ</sub>存候 京地社中之大悦<sub>ハ</sub>千家流<sub>ヘ</sub>対し大天狗<sub>ニ</sub>御座候（略）無<sub>ニ</sub>此上<sub>ニ</sub>難<sub>レ</sub>有御事<sub>ニ</sub>皆々喜申候 御社友へ御はなし候へく候<sub>（36）</sub>

この経緯について、「お声がかかりがあつたのは安政五年（一八五八）の秋頃らしいが、実際に稽古を始めたのは文久元年（一八六一）の秋のこと<sub>（37）</sub>」とされている。千宗室（玄々齋）は、すでに嘉永三年（一八五〇）には東本願寺との関係をもつていた<sub>（38）</sub>ので、この指南役の座を、藪内家、裏千家ともそれぞれあらゆる手段をつくして競い合つたことは想像にたたくない。藪内紹智（竹筍）の「千家流<sub>ヘ</sub>対し大天狗」という誇らしげな発言の背景には、裏千家との競争に勝利したという満足感があるものと考ええる。

これらの事実から、近世家元システムを實現した家元は、近世末期には、身分社会の枠をこえて、天皇と何らかの直接的関係をもつことができる状況にまで、社会的地位を向上させていたと評価して

もさしつかえないだろう。

### III 明治期の茶の湯の世界

#### 1 「天覧」にみる明治期の家元の姿

（1）明治期の「貴紳の茶の湯」と「流儀の茶の湯」

幕末以来の政治経済の混乱、明治維新以降の急激な西欧文明の導入により、茶の湯をはじめ、日本の文化や芸能は見捨てられることとなった。しかし、そうした状況もながくつづいたわけではない。のちにⅢ3でみるように、明治十年（一八七七）をすぎるところから、近世的な「貴紳の茶の湯」が復興する状況がみられた。

その復興の過程では、旧来の「貴紳の茶の湯」層にあらたに、維新の功臣、官僚、財閥関係者などが参入してくる。彼らは、由緒ある茶道具を入手し、財力にまかせて美術鑑賞中心の茶の湯を大いに流行させたのである。さらに、旧大名とならんで華族となり、茶の湯における意識のうえでも、旧大名と類似した存在であった。

しかし、その一方で、近世家元システムを實現していた「流儀の茶の湯」が低迷期を脱するには、いましばらくの時間を要した。武家層と富裕町人農民層との二重構造に立脚していた家元にとって、明治維新によつて武家の格式と収入とを失つたことの影響は意外と深刻だったのではないか。事実、家元は、明治以降も旧家臣としての行動様式を容易には捨て去ろうとしなかった。そのことは、ほぼ

近世を通じて武家に出仕していたことの重要性を物語っているように思われる。

この二つの茶の湯文化である「貴紳の茶の湯」と「流儀の茶の湯」とは、近世における「大名茶」と「わび茶」よりも、いっそう異質であり、別々の存在であるように思われる。旧大名、旧公家にくわえて、維新の功臣等を中心に華族という特権階級を作り出した明治期の社会構造は、近世社会のあり方を色濃くのこしていた。さらに、天皇の神格化が進んだこともあって、家元と「天皇との距離」は、格段に遠くなってしまったといえるのである。

(2) 井上馨邸における「天覧茶会」にみる家元の姿

明治二十年（一八八七）四月、明治天皇は、井上馨（天保六年（一八三六）～大正四年（一九一五））の鳥居坂邸へ行幸した。この行幸は、芸能史のうえでは「天覧歌舞伎」として知られるが、茶の湯の歴史においても「明治天德行幸の茶会」として位置付けられる。家元と「天皇との距離」の観点から検討するために、本稿では「天覧茶会」としてあつかうこととする<sup>(10)</sup>。

井上馨邸への行幸について、『明治天皇紀』には、つぎのとおり記載がある。

二十六日 外務大臣伯爵井上馨の麻布鳥居坂第に行幸あらせら

る、是の日天気快晴、午後一時御出門、侍従長侯爵徳大寺実則陪乗し、宮内次官以下諸官供奉す、先づ便殿に著御あらせられ、馨及び家族に謁を賜ひ、（略）尋いで馨、新たに営める茶室八窓庵に奉導して、之れが観覧を請ひ、又後庭に設けたる御覧所に奉導し、歌舞伎演劇を観覧に供したてまつる、天皇の演劇を観たまふこと蓋し此れを以て嚆矢と為す、（以下歌舞伎に関する話題がつづく―引用者注）翌二十七日皇后、二十九日皇太后亦行啓あらせられ、演劇等を御覧あらせらるゝこと概ね行幸の時に同じ、<sup>(11)</sup>

ここでは茶会ではなく、天覧歌舞伎の話が中心となっている。行幸を迎えた井上馨の側にしても、『世外井上公伝』によれば、

四月二十六日は公が鳥居坂邸に茶室八窓庵を営み、その建築が竣功したので、八窓庵開きを行はうとした日である。この日行幸を仰いで余興として天覧劇を催したのである。この八窓庵はもと奈良東大寺四聖坊に附属してゐた建物であつて、茶道の開祖珠光の造営と伝へられてゐる。それを公が奈良巡遊の際に買求め、今度鳥居坂邸に移したのである。<sup>(12)</sup>

と茶室の説明があるのみで、茶道具についての記載もなく、そのあ

とは天覧歌舞伎の話題にうつり、演目および出演者の記載があり、つぎのとおり天皇の感想まで記されている。

天皇には侍従を顧みられて、「これは近頃珍しきものを観た。」と仰せられ、「演劇は能に比すれば判りもよく、高時（北条高時―引用者注）の場は取分け面白く覺えた。」と頗る御満足に入らせられたといふ。<sup>(43)</sup>

そもそも、このできごとは、政治史の上では、条約改正を急いだ井上馨の外務大臣時代のことであり、『世外井上公伝』においても、条約改正の章の一つのエピソードとなっている。また、この時期は、欧化政策の影響をうけた歌舞伎の「演劇改良」がこころみられており、「更に之を促進せしめ斯界の向上革新を図る」<sup>(44)</sup>ことが、天覧歌舞伎の目的でもあったのである。

その一方で、明治天皇は、茶の湯への関心がうすく、喫茶すらしなかった。明治近代国家の象徴としての役割を担う明治天皇が、近世と変わらぬ茶の湯に関心を示さなかったとしても、それは至極当然のことであろう。<sup>(45)</sup>この行幸について、「近代演劇史の上では詳しく論じられながら、行幸が井上邸内の八窓庵開庵を目的としたものであるにもかかわらず、茶道史上の意義は必ずしも注意されてきたとはいいがたい」<sup>(46)</sup>と指摘されている。しかし、この実態からすれば、

あまり過大な評価をすべきではないと考える<sup>(47)</sup>。茶の湯の歴史のうえでは、これは「貴紳の茶の湯」の世界でのできごとであって、その後の「流儀の茶の湯」の発展への影響もかぎられたものであろう。

しかし、熊倉功夫が指摘するように、この天覧茶会は、「ちょうど江戸時代初期の將軍御成とはなはだ似かよつ」<sup>(48)</sup>たものであり、茶の湯が「行幸をひき出すための契機」<sup>(49)</sup>となっている。すなわち、近世の武家社会における儀礼としての茶の湯が、明治時代にも有効に機能し、「貴紳の茶の湯」の場には、天皇もなんら問題もなく行幸できるのである。当時の新聞記事も天覧歌舞伎を中心に報じているが、つぎに示されているとおり、茶の湯が主、歌舞伎が従<sup>50</sup>という認識がうかがえる。これは茶の湯と歌舞伎との社会的評価のちがによるものであろう。

○井上伯催ふしの演劇 此ごろ世の中に鳥居坂の御催しとて言ひ囃すは是れなん麻布鳥居坂なる井上伯爵茶室八窓庵開きに付余興として演劇を催ふし畏くも上御三方の御行あらせられ同所辺は車声地を震かし電灯天に映じて遽に不夜の城を築きし古今未曾有前代未聞の御盛事にてぞありける（以下略）<sup>(51)</sup>

議論がやや別の方向に展開した。本稿で論じるべき「天皇との距離」に関して確認しなければならないことは、この茶会における家

元の姿である。つぎのとおり後年の聞き取りがのこされている。

井上侯後室（井上馨夫人武子―引用者注）八窓庵に就き様々の昔語りを為したる中に、八窓庵が鳥居坂に在りたる時、明治天皇、英照、昭憲皇太后御臨幸の節、三陛下共に八窓庵中に入らせられて一応飾附を御覧ぜられ、英照皇太后は川上宗順の手前にて御茶一服召上られたるやう記憶す、川上は平身低頭して俯むきながら茶を点てたるが今尚ほ眼中に残り居れりなど語られぬ。<sup>(31)</sup>

点前をしたとされる川上宗順（天保九年（一八三八）―明治四十一年（一九〇八）は、近世中期に江戸で千家流を広めた川上、不白の流れをくみ、江戸千家浜町派、現在では表千家不白流と称する流派の家元である。明治期には東京で有名な宗匠であり、その教えを受けた者は「貴紳の茶の湯」にもすくなくない。<sup>(32)</sup>しかしながら、ここでは、井上馨という有力なパトロンに依存する陰の存在となつていて、公式の記録には名前すら出てこない。すなわち、「天皇との距離」でいえば、天皇↓井上馨↓家元<sup>33</sup>の関係であり、家元は、近世の武家における茶堂同様の「陪臣」の立場にある。

(3) 明治天皇行幸における表千家家元の姿

同じ明治二十年（一八八七）、天覧茶会にさきだつて、明治天皇と茶の湯とのかかわりがあった。<sup>(33)</sup>明治四年（一八七二）にはじまる京都博覧会の一環として、この年には京都で第十六回新古美術会が開催された。ここに明治天皇の行幸があり、その際に天皇への献茶がおこなわれた。<sup>(34)</sup>つぎのとおり記録がのこされている。

明治二十年二月一日、西京御駐輩の節、苑内博覧会場に於いて三井八郎右衛門氏より献茶之記

#### 献茶

御茶器 木地アラ、木棗 袋白地金襴

御茶碗 金襴手天目

御台 梅木地銀縁 杉木地縁高足付

御菓子 紅餡餠 雪餅

御取菓子 土器足付 千年友 有平松葉

御茶 松之露

御苺盆 桐木地足付

御火入 交趾摸 和全作

御手炉 七宝八角長

囲六疊敷

屏風 雪中松之画 応挙筆



懸物 小倉色紙 うかりける

一風 白茶地古金襴

表装 中 花色地古金襴

上下 茶地唐物緞子

花入 青竹置筒

不審菴庭前竹ヲ以碌々斎作

花 紅梅白椿

釜 日之丸 与次郎作 瀬尾有兵衛伝来

炬縁 梅木地鱗鶴蒔絵 吸江斎好

(略)

茶入 二見 箱書付小堀遠州

鴛鴦裂

袋 白茶地古金襴模様馬乗人物鶴 遠州緞子

茶碗 御所丸

同替 黒 長次郎作 銘面取 箱書付宗旦

(略)

右明治二十年二月一日於御苑内博覧会場執行之

三 井 高 朗

三井八郎右衛門

奉点 千 宗 左<sup>(55)</sup>

これは一般公開の展覧会であるので、後段の「囲六疊敷」以降は展示物を示し、「献茶」の部分は、すべて「御」が付いていることが示すように、明治天皇への献茶に使われた道具と考えられる。これらの展示および献茶をしたのは、三井総領家の三井高朗および三井八郎右衛門である。当時の表千家家元である第十一代千宗左（碌々斎）（天保八年（一八三七）～明治四十三年（一九一〇））は、「奉点」とあり、点茶をしたことは明らかであるが、献茶の主体という立場ではない。<sup>(56)</sup> ここでも家元は、有力なパトロンに依存する陰の存在となっているのである。

(4) 皇后行啓における裏千家家元の姿

明治天皇の皇后（のちの昭憲皇太后）は、明治二十三年（一八九〇）に京都府高等女学校<sup>(57)</sup>を訪問した。このことについて、つぎのとおり記録がある。

○皇后宮陛下臨御

予て仰出されし如く 皇后宮陛下には四月廿七日当高等女学校へ 臨御遊はせらる（略）同十一時前御着輦遊はせらる各課長府立学校院長学務課員本校職員卒業生并に現在生徒等校外に整列し書記官及京都婦人慈善会員は門内にて奉迎し府知事は玄関前にて奉迎せらる 陛下には直に便殿へ 入御遊は

せられ御昼餐を聞召させらる此時三井高朗同三井八郎右衛門両氏より御茶を献上せらる（千玄室点茶）<sup>(58)</sup>

これも前記（3）と同じく、三井家から献茶をしており、実際に点茶をしたのは、裏千家第十二代千宗室（又妙斎）（嘉永五年（一八五二）～大正六年（一九一七）。明治十八年（一八八五）に家督を譲り、千玄室と称した。）である。<sup>(59)</sup> かつこ書きで家元の名前がのこるものの、やはり家元は有力なパトロンの陰の存在となっている。前記（2）の記録が天皇あるいは井上馨の視点であるのに対して、この資料は、前記（3）とともにやや低い視点で記されたものであればこそ、さいわいにも家元の名前がのこされているのである。<sup>(60)</sup>

## 2 明治期における家元の自己認識

いま、明治二十年頃の家元の姿に関する三つの事例を紹介した。つぎに、家元側の資料から、明治期における家元の自己認識がどのようなものであったかを検討する。

まず指摘できることは、大名家に仕えたという歴史を放棄したり、否定したりすることはなかったことである。大名家家臣であったことは、「平民」ではなく、「士族」の身分を有することを意味し、経済的な意味は失われたとしても、庶民に対しては誇りうる歴史であった。

それを示すものとして、裏千家第十三代千宗室（円能斎）（明治五年（一八七二）～大正十三年（一九二四））と旧主家との関係をみることにする。千宗室（円能斎）は、明治四十四年（一九一一）に上京し、旧伊予松山藩主久松勝成の八十歳のお祝いのお茶会に参上している。裏千家の機関誌『今日庵月報』には、つぎのような記事がある。

### 久松老公の御祝茶

明治四十四年六月旧松山藩主久松老公第八十回の御誕辰に当らせられたるを以て数々の御催しもありたる内に二十八日二十九日の両日は御邸内の寒雲亭に於て朝野の知名の士を招かれて正午御祝茶を催されたり

主、老公

御水谷、円能斎

助手 田中宗卜<sup>(61)</sup>

この「御水谷」とは、一般には「水屋」と記される、茶会の裏方の仕事である。茶の湯の技量に優れていなければできないが、まったく表にはあらわれない役割である。ここでの主役はあくまでも久松老公であり、千宗室（円能斎）は、わざわざ上京して裏方をつとめているのである。この茶会にまねかれた安田善次郎は、自身の茶会記『松翁茶会記』に、つぎのとおり記している。安田善次

郎の目には、千宗室（円能斎）の姿は映じていないようである。

六月二十九日正午 久松老伯八十賀寿の茶事、伊藤、石黒、

三井（番町）、増田<sup>マヤ</sup>、青地、番外一員の諸氏と余の七客

席 寒雲亭

真白子飾

掛物 清巖和尚横物 松山万々歳

花生 利休竹一重 花 白みつまた 宗旦きく

茶入 名物雲山 袋 しぐら漢東

茶杓 秀吉公作共筒

茶碗 斗々屋 銘老友

香合 堆朱椿無双

後座あり 松蒔絵の中棗引物<sup>(62)</sup>

この前後の千宗室（円能斎）の動きも『今日庵月報』に記されている。京都を出てから帰るまでの行動を示すと、つぎのとおりである。

十九日 円能斎本日より御東上

二十日 久松家へ円能斎参邸

廿二日 久松家に於て老侯御八十歳御年賀に付真白子御引渡、

立合池内久親殿及田中宗卜氏

廿三日 久松家にて御稽古申上

廿四日 円能斎は九鬼家へ参邸

廿五日 久松家の御祝賀会に紅葉館に参列

廿六日 九鬼家へ参邸

廿七日 御前調べの為久松家へ参邸

廿八日 久松家御茶事御用勤務

廿九日 同右

三十日 午前八時半の急行列車にて円能斎御帰京あり<sup>(63)</sup>

ここの「九鬼家」とは、おそらく三田藩出身で、文部官僚として美術行政に辣腕をふるった九鬼隆一（嘉永五年（一八五二）～昭和六年（一九三一））のことと考えられる。千宗室（円能斎）の妻の実家が旧三田藩士<sup>(64)</sup>であることから、その縁で訪問したものであろう。九鬼隆一は、三田藩主九鬼家の出身ではないが、勲功により男爵を授けられていた。三田藩出身者としては、旧藩主九鬼子爵家に準ずる存在ともいえる大物である<sup>(65)</sup>。このように、東京滞在中は、一日だけ記録を欠くが、それ以外は、千家の旧主久松家か、妻の実家の旧主ゆかりの九鬼家の関係で終始している。

このように、千宗室（円能斎）といえども、旧主との関係では、家臣と同様のあつかいである。しかし、この関係でも、千宗室（円

能齋）にとつては好ましいものであったといえるのかも知れない。

久松勝成は、忍叟と号し、後述する当時東京の有名な茶人による和敬会の会員であるように、茶の湯を好んだ「殿様」である。

たとえば、明治四十二年（一九〇九）四月二十六日にも、千宗室（円能齋）は上京し、久松家を訪問している。<sup>(67)</sup>『今日庵月報』には「久松家に於て宗室上京に付特に御茶被下御席は寒雲亭にて御都合上大炉の御扱万端御略式御取合突然の御催ながら御行届には恐入候」として、道具組、懷石の内容が記されており、千宗室（円能齋）は、「尚大炉の御扱など余程御熟練恐入候」とのべて、久松勝成の茶の湯の技量を高く評価している。<sup>(68)</sup>身分はちがっていても、茶の湯を通じての心かよう交流があったことがうかがえる。

しかし、明治四十五年（一九一二）に久松勝成が死去して以降、旧主久松家と裏千家の關係は、久松家家扶を通じての儀礼的な關係だけとなる。それは、大正三年（一九一四）の千宗室（円能齋）の銀婚式の際の書翰をみれば、明らかである。

#### 久松伯爵家扶來翰

拝啓春寒料峭之候御揃愈御清適奉欣賀候陳者御成婚後滿二十五年二被為成候二付御記念品御送越相成早速及披露候処目出度御儀二被存候就而ハ乍些少慶賀之印迄左之通御贈被成候間御受納被成下度候敬具

一御肴料 壹封

大正三年三月十六日

久松 家扶

千宗 室 殿

同 令 夫人<sup>(69)</sup>

意識のうえだけとはいえ、明治維新のちまでも、旧主と裏千家との間でこうした前近代的な關係がつづいていたことは、ひじょうに奇異に感じられるかも知れない。しかし、表千家においても同様に、第二次世界大戦の直前まで、紀州徳川家との關係は、旧主と旧家臣との色合いをのこしたものであった。表千家第十三代千宗左（即中齋）（明治三十四年（一九〇二）～昭和五十四年（一九七九））は、昭和十四年（一九三九）の時点で、正月の行事に関連して、つぎのとりのべている。

私の家の元旦の朝のしきたりは、大体かうである。大晦日の夜から残月亭にお釜をかけて置く。そして元旦未明には炉中の火を改めて、若水を汲んで、お釜も改める。（略）

それから家族玄関一同、お雑煮を祝ふ。お雑煮が済む頃には、残月亭のお釜もよく煮えがついて来る。

そこで大福の茶をはじめ。（略）

丁度この大福が済む頃に、漸く夜はあけそめて、次第々々に明るくなつてゆく。つぎに職家の人々が年賀にくるのは朝の八九時頃だから、未だ一寸時間がある。その間に旧主紀州徳川侯〔年賀状をした、め、更に元旦の試筆をかく。〕<sup>(20)</sup>（傍線引用者）

このように、千家家元が近世の旧主に対して旧家臣としての行動様式をながらくのこしていたことは、不思議に思えるほどである。それだけに近世における武家への出仕が大きな意味をもっていたことをうかがわせるのである。

### 3 近代における「貴紳の茶の湯」——松浦家の茶の湯——

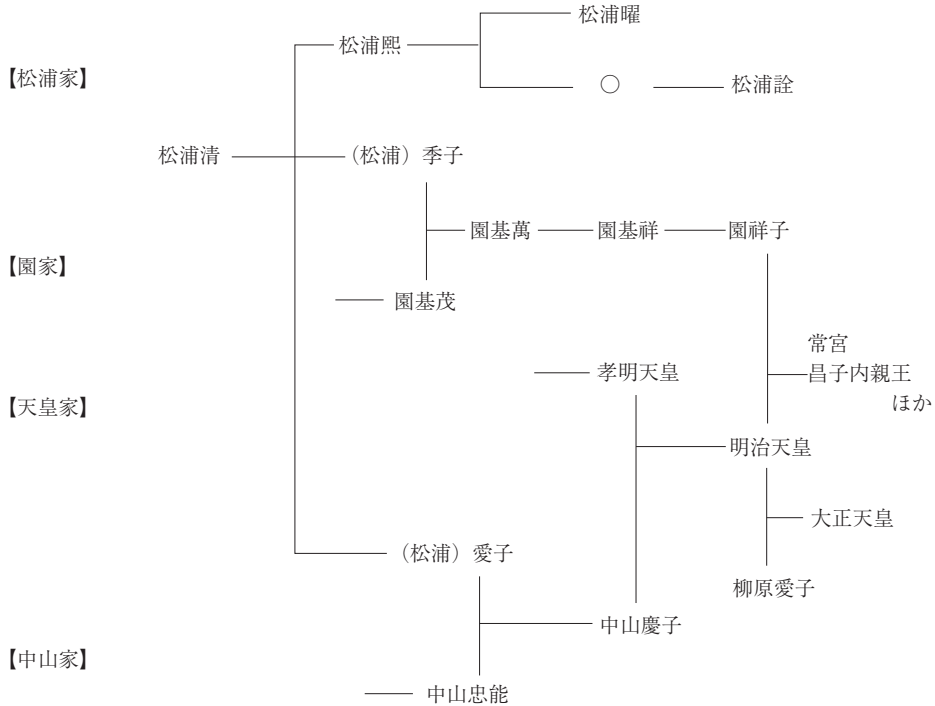
(1) 「大名茶」そして「貴紳の茶の湯」としての鎮信流

明治四十四年（一九一）六月の久松勝成の茶会では、安田善次郎の目に千宗室（円能齋）の姿は映じていないとのべた。しかし、この二人はおたがいに面識がないわけではない。『松翁茶会記』には、明治三十四年（一九〇二）「十一月十五日正午 松浦伯爵の口切茶事、千家宗室、黒田綱彦、益田克徳、伊集院兼常の諸氏と余<sup>(21)</sup>」と記されているので、この時には同じ茶室でひとときをともにしているはずである。「貴紳の茶の湯」と「流儀の茶の湯」とは、異質な存在ではあるが、接点がないわけではない。ここでは視点をかえて、近代における「貴紳の茶の湯」の状況を中心にみることにする。

さて、この松浦伯爵とは、旧肥前平戸藩主松浦詮（天保十一年（一八四〇）～明治四十一年（一九〇八））のことである。松浦心月として知られるこの人物は、安政五年（一八五八）に六万七千七百石の平戸藩を襲封し、第十二代藩主となった。明治以降も、麁香間祇候、明宮（のちの大正天皇）祇候、御歌所参候、常宮（昌子内親王）御養育主任などを歴任し、明治二十三年（一八九〇）帝国議會開設後は、貴族院議員となり、それを終生つとめるなど、明治期の大名家のなかに重きをなした。その背景には、明治天皇の生母中山慶子の実母が松浦家出身であり（図2参照）、天皇家の信頼が厚かったことがあると考えられる<sup>(22)</sup>。一般に六万石余の大名家としては、子爵であるところを、例外的に伯爵を授けられているのはそのためであろう<sup>(23)</sup>。また、大名華族のなかでも、とくに富裕な家としても知られていた<sup>(24)</sup>。

茶の湯に関することとして、この平戸藩松浦家の第四代藩主松浦鎮信<sup>ちんしん</sup>（元和八年（一六二二）～元禄十六年（一七〇三）、号天祥）は、片桐石州（慶長十年（一六〇五）～延宝元年（一六七三））に学び、のちに石州流の一流派である鎮信流（石州流鎮信派）を創始した。その独自の茶の湯観は、「文武は武家の二道にして、茶湯は文武両道の内の風流なり。さるによりて柔弱をきらふ。つよくしてうつくしきをよしとす<sup>(25)</sup>」と伝えられる。松浦鎮信は、片桐石州門下の村松伊織（明暦二年（一六五六）～享保八年（一七三三））を茶堂として召し

図2 天皇家と松浦家との関係を示す略系図



抱えた。のちに家老となった村松伊織は、豊田監物と名をあらため、その子孫である豊田家代々が鎮信流の茶の湯を継承した。そのほかにも、茶堂をつとめた家として、久家、須藤などがあつた。松浦詮が、この平戸藩に伝わる茶の湯を本格的に学びはじめたのは、明治四年（一八七二）に廃藩置県となり、平戸藩知事を免ぜられて以降のことである。その経緯はつぎのとおり伝えられている。

政務多端にして啓処に遑あらず。且つ少壮の時は文武研鑽の爲余力無き事とて、親から点茶するまでには至らざりき。然るに明治四年廃藩置県となり、公（松浦詮―引用者注）も亦平戸藩の知事を免ぜられしかば、（略）是に於て始めて松浦家伝ふる所の茶道に入るの機を得たり。時は是翌五年十月六日にして、実到天祥公（松浦鎮信―引用者注）の正忌日なり。（略）公は始めて志自岐園製する所の茶を採つて之を点し、天祥公の書幅に献じ了りて拝礼す。正午会席あり。（略）公は側より之を見物し、後薄茶を点じて、一々之に賜ふ。<sup>(17)</sup>

明治十年（一八七七）をすぎるところには、つぎのとおり、松浦詮の茶の湯活動も活発となる。それは、ちょうど「貴紳の茶の湯」の復興期にもあたっている。<sup>(18)</sup>



明治九年の頃、伯（松浦詮―引用者注）は久家涼甫を家従と為し、折々茶事に就いて学ぶ所ありき。（略）十一年の際、須藤栄を平戸より召し、頻に茶道を攻究す。（略）伯は此頃より追々数寄者と交際を初め、諸処の会席にも往来せり。（略）越えて十二年十月六日、栄より九通の奥秘を皆伝せり。（略）伯の茶道は是より愈々進展して、爾後書院、書斎にも炉を切り、又形外室といへる席を造りたり。毎月四、九の日を以て稽古日と定め、家族を初め、奥表の好みの者には稽古することを許し、又他より入門を請ふものも尠からざりき。<sup>(79)</sup>

## （2）松浦詮と「貴紳の茶の湯」

このように明治初期から茶の湯の世界に入り、まさに「大名茶」である鎮信流の中興の祖となった松浦詮であるが、もつとも知られている活躍の場は、明治三十一年（一八九八）<sup>(80)</sup>にはじまる「和敬会」であろう。

和敬会は東都茶人の一団結なり。明治三十一年を以て創立す。青地湛海（幾次郎）石黒況翁（忠恵）伊藤宗幽（雋吉）伊東玄遠（祐麿）岩見律叟（鑑造）金澤蒼夫（三右衛門）戸塚益浦（文海）東素雲（胤城）東久世古帆（通禱）久松忍叟（勝成）松浦心月（詮）松浦無塵（恒）三田櫨園（葆光）三井華精（高保）安田

松翁（善次郎）岡崎淵冲（惟素）の十六人より成る。世に之を十六羅漢と称す。会員中死亡して欠員ある毎に之を補充せしかば、後には三井松籟（八郎次郎）瓜生百里（震）吉田楓軒（丹右衛門）馬越化生（恭平）益田観濤（孝）竹内寒翠（専之助）等の諸氏相尋で之に加入せり。巡回して茶会を催し、互に奢侈を戒め、質素を旨とし、茶道の本意を世に示しぬ。而して公は実に其の首唱者にして又牛耳を執りしなり。<sup>(81)</sup>

これらの華族、豪商らの近代数寄者たちが、おたがいに茶会をもちまわりしたという茶の湯のあり方は、まさに「貴紳の茶の湯」の名にふさわしいものである。

さて、「天皇との距離」に関しては、つぎの事例がある。

（明治三十年（一八九七）三月）十七日、（略）、直に東宮殿下を御用邸に奉伺す。御側近く召させ給ひて、懇なる御言葉あり。邸内の御散歩に御供仕へ奉れり。十八日、三島に至り、常宮、周宮両内親王殿下を御旅館に伺候し、三島神社に詣で、帰りぬ。夕方、東宮殿下に参候す。御手づから採らせ給へる松露を賜はりければ、辱けなさの余り、伯の詠める歌。

老いせざる千代の薬と我君のめぐみにかゝる松の露かな  
十九日、復た参候して、帰京の御暇乞す。仰言あり、抹茶を点

じて奉れり。(略)二十二日、参内して天機を奉伺し、又東宮殿下の還啓を奉迎す。<sup>(82)</sup>

ここで、松浦詮は、「東宮殿下(大正天皇)」の命により抹茶を点てて献じている。また、明治二十九年(一八九六)二月二十日「東宮に、沼津に参候して、茶箱、棗、茶杓、及び林檎一籠を進献し」、<sup>(83)</sup>明治三十一年(一八九八)五月三十日「東宮御所に参謁して、雲丹、鯨肉を進献し、添ふるに水指、柄杓立を以てす」<sup>(84)</sup>のような茶道具献上、明治三十四年(一九〇二)十二月十八日「皇后陛下より御茶一壺を賜はる」<sup>(85)</sup>などの記録もみられる。このように、天皇家と松浦詮との間では、濃密ともいえるような日常的な交渉があったことがうかがえる。

その他の皇族についても、早い事例からいくつか示すと、明治十年(一八七七)一月八日「二品有栖川宮熾仁親王、鳥越邸に台臨せらる。御茶を進献す」<sup>(86)</sup>、明治十七年(一八八四)四月十三日「小松宮を招請して、御茶を進献す」、同月二十四日「北白川宮能久親王、伏見宮貞愛親王を招請して、御茶を進献す」<sup>(87)</sup>、同年十一月二十一日「小松宮、同妃、台臨せらる。御茶を進献す」<sup>(88)</sup>、明治十八年(一八八五)一月七日「北白川宮より、茶事につき招請を蒙る」、同年三月十一日「山階宮晃親王、小松宮彰仁親王を招請して、御茶を進献す」<sup>(89)</sup>など、茶の湯を介しての交際がみられる。

### (3) 松浦詮と「流儀の茶の湯」

「貴紳の茶の湯」の中心的人物であった松浦詮は、一方で、「流儀の茶の湯」との接点をもっていた。明治期の「貴紳の茶の湯」と「流儀の茶の湯」との位置関係を理解するために、とくに松浦詮と千家家元との交流について、若干の検討をくわえておく。

まず、松浦詮が千家を訪問した事例についてみることにする。明治二十五年(一八九二)十一月三日「千宗左を訪ひ」<sup>(90)</sup>をはじめとし、明治三十一年(一八九八)四月十七日「千宗左を訪ひしが、在らず。庭園を一観して帰る」<sup>(91)</sup>、明治三十二年(一八九九)十一月七日「正午、千宗左を音問す」<sup>(92)</sup>、同月八日「午下、千宗室に招かる。又隠といへる草庵に案内せり」<sup>(93)</sup>と記録がのこされている。ただし、これらはいずれも正式の茶会ではなかったようである。

正式の茶会と考えられるのは、明治三十四年(一九〇二)六月のことである。松浦詮は、「千家表裏の風炉、其の他、京阪教寄者の茶会に臨まんが為」<sup>(94)</sup>に関西へおもむいた。九日「千宗室の茶会に赴く。寒雲亭にて懷石、濃茶、薄茶の設あり」、十二日「正午には、千宗左の茶会に列す。不審庵に案内せり」と記されている。このように簡単な記述であるのは、再訪のためだけではないだろう。たとえば、このときの一連の茶会のうち、十四日の藤田伝三郎、翌十五日の平瀬露香は、さすがに「貴紳の茶の湯」の代表的人物であるから、

正午、藤田伝三郎君の邸に到る。網島の東岸に在り。種々の名器を陳列し、市隠の額かけたる小庵にて、茶事を催せり。

夕三時より約を履みて、平瀬露香<sup>マ</sup>がり行く。一方菴にて種々の名器を取り出し、茶の湯せり。主翁は武者小路派なれども、不昧の流を汲みて、茶道に巧者なりき。<sup>(95)</sup>

とあるように、「種々の名器」という松浦詮の感想は当然であろう。しかし、十六日の藪内家訪問についても、

正午、藪内紹智に到る。紹智は古伝を維持して、名高き宗匠なれば、一会を所望したるなり。庭中にある豊太閤拝領の熱田の金燈籠、文覚の塔の手水鉢、雪の朝の火燈など、皆名高きものにて、燕菴は古田織部正の好みし席、取出し、器は、何れも家祖以来襲伝の名器、天下一の丸壺、松の木盥<sup>マ</sup>、姫瓜の花生、一里の銅鑼などは殊に逸品たり。耳順の翁にて、茶道に熟したれば、待遇尤も懇切なりき。<sup>(96)</sup>

と記されているのを見ると、「貴紳の茶の湯」に親しむ松浦詮の目にうつる当時の千家家元は、それほど名器を所有しているわけではなく、単に歴史のある「茶堂」にすぎなかったという印象をうけざ

るをえない。

逆に、松浦詮が千家家元をまねいた事例についてもみておくこととする。流祖松浦鎮信の二百回忌にあたる明治三十五年（一九〇二）に、松浦詮は百会の追善茶会を催した。のべ五二一人におよぶ招待者のなか、千家家元もまねかれている。関係する茶会を示すと、つぎのとおりである。<sup>(98)</sup>

同（四月）廿三日、正午、晴。

第廿八会

京都裏家元	千	宗室
武庫郡魚崎酒造	山路	亀十郎
京都御池通酒造	山田	長左衛門
陸軍一等軍吏	小林	千和伎
千家取次宗匠	田中	宗ト

十月廿二日、夕五時、快晴

第七十二会

本家宗匠隠居	千	宗旦
同	千	宗佐 <sup>マ</sup>
	岩見	鑑造
京都陶工	楽	吉左衛門

同（十月）廿八日、夕四時、快晴。

第七十三会

千 宗 室  
大 竹 昌 臧  
商 宮 崎 鍬 及  
商 戸 田 宗 見

茶会では客組を重視するが、ここでの客組をみると、和敬会会員の岩見鑑造<sup>(9)</sup>を例外として、「貴紳の茶の湯」の人物と「流儀の茶の湯」の人物は、原則として分離されているようである。松浦詮は、百会のうち、ほかにも、第三十一会に千家宗匠松田宗貞、第六十二会に仙台茶道安達雲斎、第七十四会に仙台茶道清水道鑑、第八十二会に川上太白、第九十六会に旧豊後岡藩茶道千家宗匠石塚宗通などのように、茶堂（茶道）や家元・宗匠らを正客としている事例は、すくなくない。

さきに紹介した安田善次郎の『松翁茶会記』によると、明治三十四年（一九〇二）十一月十五日の「松浦伯爵の口切茶事」に、千宗室がまねかれていた。ところで、安田善次郎のこの茶会記には、自会記二十八会、他会記約三五〇会が記されているが、そのうち、千家家元が亭主となっている茶会はおそらく一例のみ、客となっている茶会は上記以外に一例のみと、ごくわずかである。しかも、その二例とも表千家のパトロンともいえる三井家が関係しているものである。

さらに、のちに和敬会会員となる高橋義雄（文久元年（一八六一）昭和十二年（一九三七）、号箒庵）は、明治四十五年（一九一二）から昭和十二年（一九三七）まで『東都茶会記』、『大正茶道記』および『昭和茶道記』として、茶の湯関係の記事を新聞に連載した。そのなかに当時の千家家元が登場することは意外とすくない。たとえば、千家を訪問したことは、大正四年（一九一五）六月十七日の表・裏千家、大正九年（一九二〇）五月十九日の表千家<sup>(10)</sup>、昭和六年（一九三一）四月八日の裏千家<sup>(10)</sup>の三回であり、そのうち大正四年に関しては「京都に赴きて表裏千家、藪内若しくは西山西芳寺等の茶室を親検する」とあるだけで、具体的な記述はない。大正九年の表千家訪問は、『大正名器鑑』の取材の一環であり、昭和六年の裏千家訪問は、茶室見学が主目的である。このように、高橋義雄は、茶会にまねいたり、まねかれたりする対象として千家家元をみていないのである。それほどまでに、「貴紳の茶の湯」と「流儀の茶の湯」とは別々の世界を形成していたといえるのである。

このように比較検討すると、松浦詮は、自身も一流派の家元であり、また茶の湯全体の振興をおもんばかってか、千家家元をはじめとする「流儀の茶の湯」の関係者に好意的であったと考えられる。たまたま『松翁茶会記』に記された明治三十四年（一九〇二）の「松浦伯爵の口切茶事」は、安田善次郎にとってみれば、「貴紳の茶の湯」において千家家元が尊重されていた、きわめて特殊な茶会で

あったのである。

(4) その後の松浦家の茶の湯と「天皇との距離」

松浦詮の活躍は、個人的資質によるところが大きいとはいえ、松浦家の歴史や天皇家との姻戚関係、そして皇室の藩屏として特権が付与されていた華族制度などの前提条件にささえられていた。松浦詮は、明治四十一年（一九〇八）に没するが、華族制度という担保によって、その立場は、制度的に、松浦家に引き継がれ、おのずと「天皇との距離」も定まっていたといえる。ここでは、昭和初期までの松浦家の茶の湯と「天皇との距離」についてみておく。

松浦詮ののち、松浦家をついだのは、松浦厚（元治元年（一八六四）～昭和九年（一九三四）、号鸞洲）である。明治四十四年（一九一一）に貴族院議員に選出され、昭和六年（一九三二）に辞職するまで、おもに政治の世界で活躍した。<sup>(9)</sup> その一方で、『松翁茶会記』には、明治三十二年（一八九九）九月十八日の茶会以降、「小松浦」として登場し、のちには和敬会会員にも名を連ねるなど、「貴紳の茶の湯」の世界での存在感もみのがせない。

この松浦厚およびそれ以降の松浦家の茶の湯について、松浦素は、つぎのとおり述べている。

（松浦厚の——引用者注）妻益子（浅野長勲養女）は心月の後を

受け、心月の側室・千恵子の助力を得つつ、極めて厳格な指導に当り、今上の皇后御成婚まで、久邇宮家に、良子女王殿下のご命によりお稽古を申上げ、これから今上の四内親王に厚の長子・陞（如月（注記一部略——引用者注）の妻・治子が呉竹寮に参上、お稽古を申上げた。<sup>(10)</sup>

これによると、大正期から昭和初期には、松浦家には、天皇家に対する茶の湯指導という状況があつたことがわかる。松浦厚の伝記には、そもそも茶の湯関係の記事にとぼしいが、この引用文前段に關して、つぎのとおり記載がある。

（大正七年（一九一八）九月十四日、久邇宮女王の御使として、松平直亮伯の家臣村田朔一郎氏、来邸し、伯夫人に再応御茶御教師を御依頼の旨を伝ふ。○廿五日、久邇宮家に参候す。

十月五日、久邇宮家より御使者あり、伯夫人応対す。（略）○十九日、伯夫人、御点茶御稽古御用の為、久邇宮家に参候す。<sup>(11)</sup>

（大正九年（一九二〇）一月）○十二日、伯夫人、御茶御稽古始の為、久邇宮御殿に参候す。<sup>(12)</sup>

このような松浦家の茶の湯と「天皇との距離」のあり方は、第二

次世界大戦後、華族制度という枠組みがなくなると、必然的に希薄化する。その背景には、すでに進行していた「貴紳の茶の湯」と「流儀の茶の湯」との力関係の逆転があった。このことを端的に示す事例は、のちにⅤ-1において検討する。その前に、ほぼ同じ時期に「流儀の茶の湯」の世界で進行していた状況に視点をうつすこととする。

#### Ⅳ 大正・昭和初期の家元像——独立の存在として認められる家元——

##### 1 家元による「皇族への献茶」

###### (1) 家元の社会的地位の上昇

Ⅲ-1においてみた明治期の家元の姿は、「天覧」の場における、<sup>⑧</sup>陰の存在<sup>⑨</sup>であった。「天皇との距離」でいえば、この陪臣的な立場を克服し、家元自身がいわば「天覧」に浴することができるようになるのは、裏千家第十四代千宗室（淡々斎）（明治二十六年（一八九三）～昭和三十三年（一九六四））が、貞明皇后（大正天皇皇后）に献茶した大正十三年（一九二四）を待たなければならない。これ以降、たびたび「皇族への献茶」の事例がみられるようになる。また、昭和初期には、家元が子爵・男爵クラスの華族階級と通婚する事例があらわれる。<sup>⑩</sup>

Ⅲ-2でみたとおり、明治期における家元は、華族階級と対等の立場には立ちえなかったことを考えると、家元の社会的地位が着実に上

昇していることがうかがえる。

ここでは、裏千家の機関誌『茶道月報』<sup>⑪</sup>にあらわれた「皇族への献茶」に関する記事を分析することにより、家元が<sup>⑧</sup>陰の存在<sup>⑨</sup>から、<sup>⑩</sup>独立の存在<sup>⑪</sup>として認められるに至る過程をたどることとする。

###### (2) 貞明皇后への献茶

大正十三年（一九二四）十二月一日、当時三十一歳の裏千家家元千宗室（淡々斎）は、この年の八月五日に父親である第十三代千宗室（円能斎）を失い、第十四代を襲ったばかりであった。この若き家元が貞明皇后への献茶という大役を担うこととなるのである。『茶道月報』<sup>⑫</sup>には、つぎのとおり記されている。

大正十三年甲子十二月一日

恐れ多くも 皇后陛下に点茶式の台覧を賜り、且つその御茶を献じ奉るの光栄を、裏千家宗家淡々斎宗室が担った事は、一家一門の名誉なるのみならず、流儀如何を論ぜず、<sup>ママ</sup>茶道の上よりして至上の榮譽であると共に、茶道史の上から申しても特筆大書さるべき大事蹟であります。（略）

それが大正の今日に京都府庁を通じて、この恩命を蒙り、かくの光栄に浴し得たのみか、広からぬ茶席に御尊体を仰ぎ奉



り、玉顔に咫尺して、点茶献上し奉ると言ふが如き破格の御沙汰は、至慈至愛一視同仁の御徳高く渡らせらるゝ、陛下の大御心のいや畏しこさ、只々感泣するの外はないのであります。

この献茶は、貞明皇后が京都大徳寺を訪問した際に、大徳寺方丈の八畳間でおこなわれたものである。「京都府庁を通じて、この恩命を蒙り」とあることから判断するに、直接裏千家に対して献茶が命じられたものと考えられる。<sup>⑩</sup> 献茶の実際は、つぎのとおりであった。

御席外までは円山伝衣管長が御先導申し上げ、陛下には御洋装の玉歩御軽やかに入御遊され、御席に着かせ給ひ、(略)伝衣管長は詰の席に控へます。

(略) 淡々斎は白襲紋付、紗の十徳、即ち茶の礼服を着用、静に茶道口を開き、約十秒の最敬礼後、御前に膝行して真台子、神式通り覆面を用ひて点前を奉ります。

御 茶 淡々斎銘 菊の白 竹田紹清詰

御天目台は恭しく、献上台へと置かれたものを、後見の象庵は吉見女官まで伝献、同典侍は御蓋蔽をとつて御前の卓子の上へ奉つたのを、陛下にはいと御満足気に饗せ給ふたのであります。<sup>⑪</sup>

茶席の場においても、貞明皇后と千宗室(淡々斎)との間に、介在する権威者は存在していないことは明らかである。さきにⅢ1(3) および(4) でみたとおり、明治二十年代においては、<sup>⑫</sup> 天皇(皇后) ↓ 三井家 ↓ 千家家元 であったものが、ここでは、<sup>⑬</sup> 皇后 ↓ 千家家元 の直接の関係となつている。すなわち、この時点で、家元と「天皇との距離」は、明治期よりも一段階近くなったと評価することができるのである。

(3) 大正末から昭和初期にかけての「皇族への献茶」

『茶道月報』には、その後、大小軽重さまざまな「皇族への献茶」という記事がみられるようになる。第二次世界大戦終戦時までの事例を整理すると表のとおりとなる。なお、外国の皇族の事例もふくめた。

なぜ、突如としてこうした皇族と茶の湯との関わりが活字になるようになったのか、やや奇異に思われる。この三十二事例のうち、千宗室(淡々斎)が関係していると思われるものは、半数の十六事例である。裏千家門下の活躍を広報するという意味があるのかも知れないが、なかには、まったく他流に関することや、皇族とはいえ、身内を訪問しているようなものなどもみられる。<sup>⑭</sup> Ⅲ3の松浦家の事例でみたとおり、それ以前にも「貴紳の茶の湯」では、皇族と茶の湯のかかわりがなかったわけではない。大正十三年(一九二

表 大正末・昭和初期の皇族等への献茶事例（『茶道月報』の記事による）

番号	年月日	皇族名	場所	点茶者	茶席	喫茶の種類	『茶道月報』の掲載号と場所
1	大正十三年十二月一日 （一九二四）	貞明皇后	京都・大徳寺	千宗室（淡々斎）	和室・椅子式	薄茶のみ	大正十四年一月号「皇后宮への御献茶の儀」四〇七頁
2	大正十四年十月二十九日 （一九二五）	東伏見宮大妃周子	京都・大覚寺	千宗室（淡々斎）	和室・椅子式	薄茶のみ	大正十四年十二月号「献茶のあと」口絵写真、「東伏見宮大妃殿下へ御献茶の儀」二二三頁
3	大正十四年十一月九日	高松宮宣仁親王	奈良・中宮寺	稲田高月夫妻か	和室・畳座か	濃茶・薄茶	大正十五年一月号「中宮寺の茶会」九四〇九五頁
4	大正十四年十二月十九日	久邇宮邦彦王、同妃	京都・清水寺白雲居	平井仁兵衛および初子夫人	和室・畳座	薄茶のみ	大正十五年二月号「久邇宮様へ」五五五六頁
5	大正十五年（不明）七日 （一九二六）	久邇宮邦彦王、同妃	大阪・高津神社	稲田高月	和室・畳座か	薄茶のみ	大正十五年七月号「茶室幽軒でおくろろぎの久邇宮両殿下」一二三頁
6	大正十五年四月下旬	東伏見宮大妃周子	奈良・法華寺	青田宗芳	不明	不明	大正十五年九月号「東伏見大妃宮殿下へ献茶を終へて」口絵写真
7	大正十五年九月三十日	スウェーデン王国皇太子、同妃	奈良・中宮寺	稲田高月、朝子	和室・畳座	不明	大正十五年十一月号「大正十五年九月三十日中宮寺於瑞典国皇太子同妃殿下へ献茶」口絵写真
8	昭和五年五月二十六日 （一九三〇）	久邇宮多嘉王、同妃	京都・妙法院	林楽庵	不明	薄茶のみ	昭和五年七月号「妙法院で在釜」九七〇九八頁
9	昭和五年六月五日	東久邇宮稔彦王	京都・湯浅七左衛門邸	千宗室（淡々斎）	不明	不明	昭和五年七月号「今日庵時報」一〇二頁
10	昭和五年六月六日	東久邇宮稔彦王	京都・青蓮院	千宗室（淡々斎）	和室・畳座	薄茶のみ	昭和五年七月号「青蓮院に於ける東久邇宮殿下」口絵写真、「今日庵時報」一〇二頁
11	昭和六年十一月七日 （一九三一）	東伏見宮大妃周子	京都・稲畑登美子邸	千宗室（淡々斎）	和室・畳座	薄茶のみ	昭和七年一月号「東伏見宮大妃殿下へ御献茶」口絵写真、「東伏見宮大妃殿下、久邇宮同妃殿下に御茶を献じ奉る」二〇六頁
12	昭和六年十一月十五日	久邇宮多嘉王、同妃	滋賀・日吉神社	千宗室（淡々斎）	和室・畳座	不明	昭和七年一月号「久邇宮殿下へ御献茶」口絵写真、「東伏見宮大妃殿下、久邇宮同妃殿下に御茶を献じ奉る」二〇六頁
13	昭和七年五月十八日 （一九三二）	東伏見宮大妃周子	兵庫・大倉山春猷館	黒瀬久香（神戸市長夫人）	不明	不明	昭和七年八月号「東伏見宮大妃殿下に御茶を献じ奉りて」八八〇八九頁、九八頁参照
14	昭和七年十一月五日	閑院宮載仁親王	京都・平井仁兵衛別邸	千宗室（淡々斎）	和室・椅子式	薄茶のみ	昭和八年一月号「光栄のお茶室」「お献茶後」口絵写真、「閑院宮に御茶を献じて」二〇四頁
15	昭和八年三月四日 （一九三三）	賀陽宮恒憲王	京都府立第一高等女学校	不明	不明	薄茶のみか	昭和八年五月号「賀陽宮恒憲王殿下へ御献茶」九頁
16	昭和八年四月三日	久邇宮多嘉王、同妃、若宮	大阪・水無瀬宮	水無瀬増枝夫人	和室・畳座	不明	昭和八年六月号「燈心の席へお成りの久邇宮殿下」口絵写真、「修繕なつた燈心席」久邇宮殿下が御席抜き」八九〇九〇頁
17	昭和八年四月十七日	東伏見宮大妃周子	島根・有沢山荘	有沢才也（雲州流宗家）	和室・畳座	薄茶のみ	昭和八年七月号「光栄の茶席」九八〇九九頁、昭和八年八月号「有沢山荘への御成りの東伏見宮大妃殿下」口絵写真
18	昭和九年十月十一日 （一九三四）	久邇宮多嘉王、同妃	京都・天龍寺	千宗室（淡々斎）	和室・畳座	薄茶のみか	昭和九年十一月号「後醍醐帝霊前献茶式」七四〇七六頁、昭和九年十二月号「久邇宮殿下に御献茶」口絵写真

19	昭和九年九月二十九日	東伏見宮大妃周子	愛国婦人会朝鮮本部	倉田宗錦	洋間・立礼式	薄茶のみ	昭和十年一月号「東伏見宮大妃殿下に献茶し奉る」口絵写真、「東伏見宮大妃殿下に献茶し奉りて」八一～八四頁
20	昭和九年十二月九日か	東久邇宮稔彦王	京都・大辻宗生別邸	千宗室（淡々斎）	和室・畳座	薄茶のみ	昭和十年二月号「東久邇師団長宮殿下をお迎へして」口絵写真、「宮殿下に献茶」八六～八七頁
21	昭和十年三月二十日 （一九三五）	秩父宮雅仁親王、同妃	東京・柘植曹谿邸	柘植曹谿	和室・立礼式	薄茶のみ	昭和十年六月号、柘植曹谿「秩父両宮殿下を迎へ奉りて―瑞典行茶室の光栄―」五一～五四頁
22	昭和十年四月十八日	満洲国皇帝	京都・都ホテル	千宗室（淡々斎）	和室・椅子式	薄茶のみ	昭和十年六月号「満洲国皇帝陛下、茶儀御高覧」二～五頁、昭和十年七月号「満洲国皇帝陛下御成りの『可楽庵』」口絵写真
23	昭和十年五月二十九日	久邇宮大妃親子、久邇宮多嘉王	滋賀・長尾欽彌別邸	千宗室（淡々斎）	不明	薄茶のみ	昭和十年八月号「久邇宮両殿下、東伏見伯をお迎へ申して」口絵写真
24	昭和十一年十月十日	久邇宮多嘉王、同妃	京都・北野神社（北野大茶会二百五十年記念大献茶会）	席主千宗室（淡々斎）	不明	薄茶のみ	昭和十一年十一月号「北野大献茶祭概記」中の八頁
25	昭和十一年十一月十三日 （一九三六）	香淳皇后、高松宮妃ほか	東京・女子学習院	堀越宗円	立礼式	薄茶のみか	昭和十二年一月号「台覧を賜ひし立礼御道具」口絵写真、「台覧を賜ひし立礼式」二～三頁
26	昭和十二年二月二十八日 （一九三七）	サラワク国王妃	京都・大辻宗生別邸	高橋宗伯	和室・畳座	薄茶のみ	昭和十二年五月号「茶席に於けるサラワク国王妃」口絵写真、「サラワク国王妃への呈茶」一一九～一二〇頁
27	昭和十二年六月十三日	貞明皇后	大阪・水無瀬宮	水無瀬忠政	和室・畳座か	薄茶のみ	昭和十二年七月号「皇太后陛下 水無瀬宮御参拝 点茶を台覧あらせらる」七五頁
28	昭和十二年六月二十日	貞明皇后	京都・大宮御所	後見千宗室（淡々斎）	不明	不明	昭和十二年八月号「皇太后陛下 且座式を台覧あらせらる」二～四頁、七六頁の後に写真
29	昭和十三年十一月二十二日 （一九三八）	久邇宮恭仁子女王	京都・裏千家	千宗室（淡々斎）	和室・畳座	濃茶・薄茶	昭和十四年一月号「久邇宮恭仁子女王殿下 今日庵に台臨遊ばさる」四～八頁
30	昭和十四年二月二十一日 （一九三九）	東久邇宮稔彦王	京都・裏千家	千宗室（淡々斎）	和室・畳座	薄茶のみ	昭和十四年三月号「又隠」にて御寛ぎの東久邇宮殿下」口絵写真、「東久邇中將宮殿下 裏千家にお成り遊ばさる」二～四頁
31	昭和十四年四月十六日	久邇宮大妃親子	京都・東本願寺	不明	和室・畳座	薄茶のみ	昭和十四年六月号「久邇宮大妃殿下 松亭御成り遊ばさる」口絵写真、「松亭御成り遊ばさる」七八～七九頁
32	昭和二十年七月十六日 （一九四五）	久邇宮朝融王	滋賀・長尾欽彌別邸	千宗室（淡々斎）	不明	薄茶のみ	昭和二十年十一月号「久邇宮殿下を迎へ奉り」一六頁

※茶席について、写真または記事にある記述により判断した。なお、和室・椅子式は、客は椅子座、亭主は畳座の場合であり、立礼式は、主客とも椅子座である。  
喫茶の種類について、記事にある記述または道具組により判断した。

四)の貞明皇后への献茶以降、こうした話題に対して「流儀の茶の湯」側が遠慮を要しなくなったためとも考えられる。

そもそも、大正十三年の貞明皇后への献茶は、どのような経緯で実現したものであろうか。まずその点から考えてみたい。つぎの二つの理由から、これは裏千家側からではなく、皇室側からの積極的な働きかけの結果ではないかと推測する。

第一の理由は、これが皇室側の都合で実施されたように思えることである。もちろん、皇室関係の行事にあつては、慎重かつ周到に準備が進められたはずである。いみじくも千宗室(淡々斎)は、貞明皇后を追悼して、つぎのとおりおべている。

まだ先代円能斎存命中でしたが、京都に行啓の際、一日仙洞御所で、野点をお目にかけましたのが最初でした。町尻さんのお肝入りで、お庭に幔幕を張つて、旅簞笥のお点前を円能斎が致しまして、私が後見をいたしました。お散策のおついでに御覧に入れましたが、全く絵の様な光景でございました。<sup>(2)</sup>

おそらく、これは貞明皇后への献茶の準備として、その下見がこなわれたものと考えられる。であるならば、千宗室(円能斎)の時代に貞明皇后への献茶があるはずのところ、千宗室(円能斎)の急死により、千宗室(淡々斎)の代に実現したものである。問題は、

この日が裏千家の喪中にあたることである。裏千家側の辞退にもかかわらず、皇室側の強い意向で、この献茶は予定どおり実施されたものであろう。

第二に、裏千家が、この献茶をいわば奇貨として、積極的にみずからの権威付けに利用したとは考えにくいことである。もちろん、『茶道月報』に大きく掲載されたことは事実である。しかし、慶応元年(一八六五)の千宗室(玄々斎)による「天皇への献茶」の場合、翌慶応二年一月には、拝領品披露の茶会を行い、あらたに和巾点の点前を教えるにくわえるという一連の記念行事を行った。それに対し、この献茶を記念した流儀の公開の行事としては、『茶道月報』昭和五年(一九三〇)十一月号に掲載されたつぎのものしか見当たらない。

皇太后陛下が、いまだ 皇后陛下にあらせられた大正十三年十二月一日大徳寺へ行啓遊ばされた御節、方丈内茶席に於て、恐れ多くも、御献茶申上げた、裏千家々元淡々斎は、その光栄を、永久に忘れぬ為め、毎年、十二月一日には、今日庵に於て、その記念の釜を掛けて居つたが、本年よりは一般社中とともに、此の光栄の日を記念すべく、来る十二月一日午前九時より午後四時迄在釜する事になつた。別に案内状は發送されませんが、在京社中方は、奮つて来喫されたいとの事である。<sup>(3)</sup>

II-1において「天皇への献茶」が千家の目標となっていたことを指摘したが、その目標達成の披露としては、この茶会は時期もおくられており、あまりにもささやかすぎる印象をぬぐいきれない。このような消極的な態度の背景には、第一に神格化された近代の天皇に対して、「おそれ多い」という感情があつたことは当然であろう。

旧主久松家に対してすら、家元が水屋をつとめていたことは、千宗室（淡々斎）も知らないはずはない。しかし、そのおそれ多さの一方で、千宗室（淡々斎）は、この時期の「皇族への献茶」がもたらすマイナスイメージを感じていたのではないかと考える。

それは、これらの献茶が、ほんとうに茶の湯を理解したり、楽しんでたりする目的とは思えないことである。たとえば、千宗室（淡々斎）が関係した十六事例のうち、「濃茶および薄茶」という本来の茶の湯のあり方を実践したのは、茶の湯の秘伝を受けるために裏千家を訪問した久邇宮恭仁子女王だけである。それ以外は「薄茶だけ」という略式である。道具鑑賞が主目的の「貴紳の茶の湯」でも、もっとも重視される道具は、濃茶に使う茶入である。真に茶の湯を楽しむ人にとって、濃茶のない茶会はものたりない。

また、洋式の宮中文化と和式の茶の湯文化の衝突という問題もある。大正十三年（一九二四）の貞明皇后への献茶では、貞明皇后はつぎのとおり、畳のうえにおかれた「卓子と椅子」で喫茶されたのである。

御座所は、床前から、点前座に向け斜に、宮内省差廻しの御紋章入、七宝模様の卓子布の掛つた御卓子を据えて御椅子が配されました。<sup>(10)</sup>

このとき、千宗室（淡々斎）は畳のうえで台子の点前をしたのである。このように和室に「卓子と椅子」をもちこむ方法は、大正十四年（一九二五）の東伏見宮大妃周子、昭和七年（一九三二）の閑院宮載仁親王、昭和十年（一九三五）の満洲国皇帝への献茶においても採用されたことが、『茶道月報』に掲載された写真によって明らかである。<sup>(11)</sup>

このような方法は、宮内省の指示によるものであるが、茶の湯として好ましくないことはもちろんである。武士も帯刀をはずし、せまい躰口をくぐって入る、茶室のなかには主客平等の空間であるべきというのが、茶の湯の教えである。千宗室（淡々斎）は、つぎのとおり述べている。

茶を行ひます場所、即ち茶席の装置等も、貴賤貧富の別はなく、（略）其処へ集ります人々にも此処ばかりには社会的的地位や、階級、貴賤高下の差別等を認めません、総てが平等の人と人として、心と心の赤裸々の儘の対等、赤心の交りでありまして、之が滑らかに融合する会合、つまり飾り気のない偽りのな

い人間美が溶け合ふて一つの魂になつて行くのが茶の団欒であります。<sup>(18)</sup>

このように人にも教え、みずからも実践してきたはずの千宗室（淡々斎）自身が、皇族への献茶のためとはいえ、その教えに反する行為を公然とおこなうことに、内心忸怩たるものがあつたことは想像にかたくない。閑院宮載仁親王への献茶の際には、つぎのとおりので、婉曲に裏千家訪問を辞退している。おそれ多いというところもあるが、そればかりではないように思われる。<sup>(19)</sup>

閑院宮殿下が（略）平素深く御嗜好遊ばさる、思召を以て、今日庵へ成らせらるべき旨を仰せ下されましたが、何分佗本位に造られた狭隘な茶室のみの建築でありますから、宮殿下をお迎へすることは甚だ恐懼に堪へませんので、平井東庵氏の靈鷲山荘を御推奨申上げました処、早速御聴許遊ばされまして（略）私は恭しく御茶を献じたのであります<sup>(20)</sup>

なお、「卓子と椅子」は、千宗室（淡々斎）の「皇族への献茶」において、この四事例のみであつたと考えられるので、その後、皇室側の茶の湯への認識が進んだものであろう。ただし、この「皇族への献茶」における「卓子と椅子」の問題は、のち2（2）で再度

考察する。

## 2 「皇族への献茶」の背景とその意味——期待される、新たな皇室の藩屏——

### （1）大正期における天皇制の危機

大正末から昭和初期にかけての皇族への献茶は、皇室側からの積極的な働きかけによるものであつたと推測した。そこで、皇室側の視点から、この「皇族への献茶」の意義について考察する。

まず、前提として、近代天皇制は、大正期に危機を迎えていた。海外では、一九一二年（明治四十五年）の清朝滅亡にはじまり、大正期にロシア、ドイツ、オーストリア、トルコなど、君主制国家が次々と崩壊するという、世界的な君主制危機の時代であつた。一方、国内の情勢に目を転ずれば、普選運動、労働運動、米騒動など、民衆が公然と自己の権利を主張しはじめた。さらには、大正十二年（一九二三）の虎ノ門事件のような皇太子へのテロ事件も発生した。

このような外からの天皇制の危機にくわえて、大正天皇の病氣による公務への支障は、天皇の權威をゆるがせることとなつた。他方、皇室の藩屏としての役割を担うべき華族階級は、資本主義の発展につれて、相対的に経済力を低下させており、明治期に制度設計された近代天皇制は、そのままでは維持が困難な状況に至つていた<sup>(21)</sup>



のである。

(2) 天皇制確認のための儀礼

ここでは、言説化がむつかしい「国体」という問題を、視覚化という視点で論じている原武史の議論を援用して分析をこころみる。原武史は、大正十年（一九二二）に着目し、この年の皇太子裕仁親王（のちの昭和天皇）の訪欧が「皇太子をして、大衆社会との適合を図ることで、第一次世界大戦後になお生き残ろうとする君主政のあり方を実地に学ばしめる結果につながった」と指摘し、つぎのとおり述べている。

二一年に大正天皇が病気で引退し、裕仁皇太子が摂政になっている。それとほぼ同時に天皇制の大きかりな再編が行われ、

「国体」は目に見える具体的なものになったのである。<sup>(13)</sup>

その「天皇制の大きかりな再編」を、つぎのとおり説明している。

昭和天皇（二六年までは摂政・皇太子。二六年から天皇）が自身の身体をさらすとともに、狭義の政治から疎外されていた学生生徒や女性、植民地の住民を含む万単位の「臣民」と相対する「一君万民」ないし「君民一体」の空間が、植民地を含む全

国各地に設定され、親閲式や奉祝会、奉迎会などの新しい儀礼が行われるようになることである。

これらの儀礼では、（略）儀礼に参加する人々がそこに「国体」のかたちを見るようになる。この時点で「国体」は言葉で理解するものではなく、何よりも身体ごと体験するものになる。<sup>(14)</sup>

そして、この「新しい儀礼」について、つぎのとおり評している。

元老や官僚、財閥、政党といった「夾雑物」がなく、事実上の天皇と、従来参加を許されなかった一般の「臣民」が相対する新しい政治空間が成立したことを意味していた。<sup>(15)</sup>

さらに、「大正末期には（略）皇太子だけでなく、秩父宮などの皇族や皇后による地方視察が活発となった<sup>(16)</sup>」のである。原武史のこの議論は、「皇族への献茶」を理解するうえで示唆に富むものと思われる。まず、類似点として、その時期である。貞明皇后への献茶は、大正十三年（一九二四）のことであり、事前の調査や準備の時間を考えると、原武史の指摘する大正十年（一九二二）以降の「新しい儀礼」に位置付けられるものと思われる。そして、その内容も、天皇・皇后と家元との間に存在した、明治期の井上馨や三井家のよ

うな「夾雑物」がなくなったという点で、「新しい儀礼」としての性格を備えている。「大がかり」ではないとしても、これを「国体視覚化の儀礼」と評価してもあやまりではないだろう。この時期の「皇族への献茶」に六回登場する東伏見宮大妃周子（明治九年（一八七六）～昭和三十年（一九五五））は、愛国婦人会総裁として植民地を含む全国各地の行事に出席しており、その訪問先の行事として「皇族への献茶」がおこなわれている<sup>(14)</sup>。このように、「生身の身体をさらす」ことによって皇室の存在を示した東伏見宮大妃周子の場合も、意図的に「国体視覚化の儀礼」に関与していたものと考えることができる。

さきにIV 1（3）で、茶席の畳のうえにおかれた「卓子と椅子」は、茶の湯文化にとっては好ましくないことを指摘した。「皇族への献茶」とは、喫茶を介して主客が交流する「茶の湯」と、そもそも似て非なるものである。皇族が臣民と相対する「国体視覚化の儀礼」であり、「卓子と椅子」はそのことの表象である。本来、平等の空間である茶室において、畳のうえにおかれた「卓子と椅子」の高さは、儀礼における皇族の存在を視覚化するのに十分な意味をもつものである<sup>(15)</sup>。

### （3）家元と皇室との「社会的結婚」

「皇族への献茶」の事例について検討すると、若干異なる側面も

あると考えられる。昭和天皇は「夾雑物」なしに一般の「臣民」と相対する「君万民」の構造をめざしたのに対して、「皇族への献茶」を分析するかぎり、「貴紳の茶の湯」という夾雑物を排したが、あらたに「家元」という存在を前提としているようにも思われる。とくに、参加者がかざられる茶席という空間での献茶を、「国体視覚化の儀礼」として機能させるためには、機関誌というメディアを所有する家元が不可欠である。

大衆との安全な接点、さらには新たな「皇室の藩屏」を求めている皇室側にとって、「家元」は、まさにそれにふさわしいものと想定され、実際にその期待どおりの存在であった。家元は、数多くの門弟を組織し、茶の湯を日本独自の精神文化であると教え広めていたのである。それは「国体」のめざすものと類似した方向性をもっていた<sup>(16)</sup>。

家元と皇室との良好な関係は、「現実の結婚」へと発展することによって至っているのである。その意味では、大正十三年（一九二四）は、家元と皇室との社会的な「むすびつき」の契機となった年である。家元と「天皇との距離」でいうならば、ここでは、家元と皇室との「社会的結婚」がおこなわれたと評価することができるのである。

なお、付言すると、千宗室（淡々斎）は、この「皇族への献茶」にややためらいを感じていたと推測したが、その不安感はある意

味で正しいものであったといえよう。大正・昭和初期の家元は、まだみずからの実力を十分には認識していなかった。昭和十三年（一九三八）十月に朝鮮を訪問した千宗室（淡々斎）は、肅々と茶の湯の行事をこなす一環として、朝鮮神宮において献茶式をおこなった。それは、つぎのとおり伝えられている。

二十二日 この日あたかも広東陥落の好き日。淡々斎宗匠は朝鮮神宮にて武運長久の祈願大献茶式を行はる。厳肅の氣に満ち、集へるもの無慮六百人肅として声なく清寂そのものの如し。終つて社殿にて「今日会」の結成式を挙げ、淡々斎宗匠を総裁に仰ぎ、宣誓式を行ふ。<sup>(10)</sup>

この時の記念写真が『茶道月報』に掲載されている。朝鮮神宮の巨大な鳥居の前に、ほとんどが和服姿の女性であるが、六百人も誇張ではないと思えるような大集合写真である。流儀の発展のために地道な努力をつづけていた家元は、いつのまにか戦争協力への道に迷い込んでしまうのである。それが第二次世界大戦敗戦に至るまでの千家家元の姿である。

## V 第二次世界大戦後の家元像——文化の頂点に立つ家元——

### 1 存在感を失う華族階級——前田家と裏千家の逆転劇——

(1) 前田家と裏千家との歴史的関係

I 4でのべたとおり、現在では千家家元は直接にあるいは間接に三笠宮家と姻戚関係にあり、その意味で「天皇との距離」はごく近いものとなっている。明治期には、「天皇との距離」で近い関係にあったのは、明らかに「貴紳の茶の湯」である。それが、大正・昭和初期をへて、衰退する「貴紳の茶の湯」と成長する「流儀の茶の湯」との力関係が最終的に逆転するのである。その逆転の状況を、大名華族の雄たる前田家と裏千家との関係でみることにする。

旧加賀藩主の前田家は、明治以降、爵位こそ第二位の侯爵であるが、近世における最大のだ名家の後裔として、経済力のみならず、<sup>(11)</sup>文化的にも、もつとも存在感のある大名華族のひとつであった。近代の当主がとくに茶の湯を好んだというわけではないが、多くの文化財、美術品を所有し、昭和十一年（一九三六）の「北野大茶湯三百五十年記念大献茶会」においては、前田利為（明治十八年（一八八五）～昭和十七年（一九四二））が名誉会長に推されるなど、「貴紳の茶の湯」を代表する存在でもある。

前田家と裏千家との直接的な関係は、慶安五年（一六五二）には

じまる。<sup>(10)</sup>このとき、千宗旦の四男である裏千家第四代千宗室（仙叟）は、小松に隠居した前藩主前田利常に召し抱えられ、前田利常の死後、あらためて藩主前田綱紀に仕えたのである。裏千家は、第五代千宗安（常叟）以降、伊予松山藩に仕えることとなるが、<sup>(11)</sup>前田家とは依然として関係があったという。<sup>(12)</sup>

## （2）昭和初期の前田家と裏千家

第二次世界大戦前後の前田家と裏千家との関係をみるうえで、前田利為の長女酒井美意子（大正十五年（一九二六）〜平成十一年（一九九九））は、貴重な証言をのこしている。その自伝的小説『ある華族の昭和史』<sup>(13)</sup>のなかに、結婚の相手に関するつぎのようなくだりがある。

私はまず、自分は誰と結婚しようかなと考えた。伴侶<sup>パートナー</sup>としての夫は美男に越したことはないが、十人並みの容貌で充分だ。

（略）

そこまで考えると、私は「華族画報」を開いた。それは「皇族画報」とともに不定期に発行され、限られた範囲にだけ配布されるものであった。（略）

「華族画報」には伯爵以上の名家の男子と女子の写真を載せ、その人物像を紹介している。これは見合いの重要資料ともなる

ものであった。（略）

私は「華族画報」のページを繰りながら、公卿、大名、維新の元勳の直系である青年達の記事を丹念に読んだ。そして十一名の名前を原稿用紙に書き出していった。いずれも生活環境が似ていて裕福な大名華族の息子達である。

そのあとに、「茶道の裏千家の家元千宗室を月に一、二度前田家の茶席に招いてお稽古をし、私もその席に連なることが多い」とつづき、千宗室（淡々斎）の息子たちが登場する。

若宗匠の政興、嘉治、巳津彦の三兄弟はそろって美男で、関西のみか東京ソサエティでも人気上昇中である。私は特に才気煥発な次期家元の政興―通称マイクに強く惹かれていた。彼の姉の良子も典型的な京美人で、桜井子爵と婚約しており、門弟ばかりか数多くのファンを持っている。

しかし、結局、「家元夫人（略）」にはなりたくないの<sup>(14)</sup>として、酒井伯爵家の一人息子と昭和二十年（一九四五）に結婚する経緯をつづっている。これは、やはり小説として読むべきで、どこまで真実なのかかわからないが、昭和十年代においても侯爵家令嬢の娘心には、裏千家の存在を意識しつつも、結婚の相手としては、やはり有

力な大名華族を選択することがうかがえて興味深い。

さて、そのころの前田家と裏千家との関係であるが、昭和六年（一九三二）に「湯浅邸に於ける前田侯招待茶会」があった。『茶道月報』に掲載されたその写真の説明には、つぎのとおりある。

昨年十一月十九日に湯浅指心庵氏は前田侯御夫妻京都市長京阪知名の紳士を招待して宗家淡々斎宗匠を代点に時はずれの茶会を催されし時の記念撮影で（略）<sup>(18)</sup>

湯浅指心庵こと湯浅七左衛門（明治十年（一八七七）～昭和十八年（一九四三））は、京都の著名な実業家である。今日庵老分として裏千家とも関係が深い<sup>(19)</sup>が、どちらかというと「貴紳の茶の湯」に近い人物である。金沢出身の縁で前田利為夫妻をまねいたものであろう。ここでは、千宗室（淡々斎）は陰の存在で、写真にも登場しておらず、明治期の家元の姿にもどったような感がある。

その後、昭和十五年（一九四〇）十一月十六日に前田利為夫妻は裏千家を訪問する。同じく『茶道月報』に掲載された写真では、前列に湯浅七左衛門、前田利為、前田夫人、湯浅夫人らが並び、中列に畠山一清、千宗室（淡々斎）、井口海仙、千宗室夫人らが写っている。<sup>(20)</sup>

（3）第二次世界大戦後の前田家と裏千家

軍人であった前田利為は、昭和十七年（一九四二）にボルネオ沖で死亡する。そのあとをついで侯爵となった前田利建（明治四十一年（一九〇八）～平成元年（一九八九））も、昭和二十年（一九四五）には、「十月二日午後前田侯爵一行を寒雲亭に迎へて。本席は咄々斎<sup>(21)</sup>」とあるように、裏千家に賓客として迎えられている。

しかし、前田家と裏千家とが、旧主と旧家臣であるかのごとき関係は、これが最後であった。昭和二十三年（一九四八）四月二十三日に金沢において千宗室（仙叟）の二百五十年忌の大法要が催された。ここで中心の座を占めたのは家元である。法要の次第は、つぎのとおりであった。

向つて左側には、前田利建氏はじめ、親戚の畠山一清氏、同不器氏夫妻、今日庵老分の中沢利八、堀野豊三郎、（略）向つて右側には、軍政府長官はじめ進駐軍の方々、横山氏、越沢宗見氏、芦屋の丹羽晃氏夫妻等参列される。施主淡々斎宗匠は白襟紋付十徳の正装で、同じ服装の政興若宗匠を同伴、井口総務、嘉治氏、各業躰を随へて着座。愈々法要の幕は切られる。<sup>(22)</sup>

昭和二十二年（一九四七）五月三日に施行された日本国憲法第十四条第二項には「華族その他の貴族の制度は、これを認めない」と

規定されている。それから一年にもならないうちに、華族階級は意識のうえでも過去の存在となってしまうたのである。

この仙叟忌にあわせて開催された大茶会について、匿名の対談には面白い見解が示されている。

― 佗茶宗の総本山、彼仙叟の茶風からするとまさに正反対の現象ですネ。言行不一致といふのが今の茶人であり茶会ですか。

― それが時代ですよ。桑田変じて海となり、百万石の御殿を牛肉屋さんが買ひとらんづの御時勢です。佗茶の本家が、大名茶をやってくれたからこそ、狗肉の代りに羊頭が配給された訳で三拝ものです。<sup>(10)</sup>

わび茶志向の「流儀の茶の湯」の茶人たちが、このような違和感をいだいたのも、ほんの一時期であつたことだろう。今では、「貴紳の茶の湯」も「流儀の茶の湯」に吸収され、その一部分となっているのである。

## 2 代償としての家元批判

結果的に社会的地位の急激な向上を実現し、文化の頂点に立つこととなった千家家元であるが、他方で思わぬ批判をあげられることとなった。それは、第二次世界大戦後に急にわき起こった、家元

を封建遺制とする批判である。ここで興味深いのは、家元と本願寺との対比である。たとえば、昭和二十五年（一九五〇）に、柳宗悦（明治二十二年（一八八九）―昭和三十六年（一九六二））は、つぎのとりのべている。

民主主義の今日にあって、最も呪われているのは封建制度である。封建制度の一切が悪いとはいえぬが、しかしその弊害が極めて多い現状では、それを打破しようとする企てに歴史的意義を感じる。幸にも多くの面でそれが覆えされたが、中には依然として旧習を固守するものがないではない。日本の社会に大手をふってそれを行っているものが二つある。少くともこの二つは封建制度の典型的なものといつてよい。一つは真宗本願寺に見られる東西大谷家を中心とする法主制度で、他の一つは家元、特に表裏両千家を中心とする封建制度である。<sup>(11)</sup>

小林一三（明治六年（一八七三）―昭和三十二年（一九五七））は、「戦時中から終戦後の今日迄、お茶の生活に余生を送つて居た<sup>(12)</sup>」とのべ、茶の湯に親しんでいたにもかかわらず、家元に対してさらに辛辣であり、昭和二十六年（一九五二）に、つぎのとりのべている。

御承知の如く憲法は変つた、宮様の特権はなくなつた、財閥



は解体され、農地改革によつて大地主は没落する、財産税の徴発によつて貧富は調節され、苟も先祖伝来の特権階級は許されない。本願寺サンもその執行主権者は選挙できまる、懷手して先祖や親の威光で暮して行くことは中々六ヶ敷い世の中に、独りお茶道だけが家元の暖簾のおかげで、未熟な若輩が、いつまでも〱若宗匠などと尊敬せられる理由はないといふ事を、先づ以て御本人が大悟して、そこに生きる道、行く道を考へなくては駄目だと思ふ。<sup>(8)</sup>

この時期には、千家家元と東西本願寺大谷家とは、同様に封建的存在であるように考えられていたことがうかがえる。

しかし、歴史的にいえば、この議論はやや的はずれである。一向一揆の広まりによつて戦国大名に匹敵する勢力を有した中世の本願寺の歴史はさておき、東西本願寺法主（門主）を世襲した両大谷家は、公家の猶子となる慣習や、公家との通婚によつて禁裏公家社会ときわめて近い関係にあり、近世においては、千家とは比較にならないほどの権威をもっていた。そもそも千家とならぶ茶の湯の家元たる藪内家は、西本願寺の庇護をうけていたのであり、大谷家と家元とは、完全に上下関係にあったのである。さらに近代においても、両大谷家は、ともに伯爵を授けられていたこと、久邇宮家との直接の通婚や、九条家を介して何重にも皇室との姻戚関係があったこと<sup>(9)</sup>

などを考えると、「天皇との距離」でいえば、現代の千家以上にごく近い関係にあったといえる。

にもかかわらず、歴史学者である林屋辰三郎（大正三年（一九一四）〜平成十年（一九九八））でさえも、家元制度の形成過程について、

家元が將軍や大名という政治的権力を結んで、急速に自己の権力組織を確立したものである。この制度には、かならず二つ以上の対立したものの共存する現象がみられるが、それはこの事実を裏書しているともいえる。たとえば能における四座、茶における三千家、宗教における東西両本願寺といったような並列は、これらがたがいに競合して、この制度をいっそう助長したことを考えしめる。

したがって中世には家学、家芸を相承する家元はあつても、主従関係的な家元制度として固定したのは、幕藩体制の成立と時期をともにするのであり、大たい鎖国の行われた寛永という時期であつたといえる。<sup>(10)</sup>

とのべ、家元が近世前期以来の封建的存在であるかのような理解を示している。しかし、本稿でみてきたことから容易にわかるように、家元が社会的地位を確立していた歴史はそこまでさかのぼることはできないのである。ましてや、東西本願寺大谷家と対比しうる

ような状況は、すくなくとも第二次世界大戦以前にはありえなかったといっても過言ではない。この時期に、家元に関する大いなる誤解があったことは、たいへん興味深い現象である。

## VI まとめ

幕末から第二次世界大戦直後までの茶の湯の状況を、「貴紳の茶の湯」と「流儀の茶の湯」との二つの茶の湯文化の消長という視点で検討した。分析方法として「天皇との距離」という指標を用いたのは、別々に存在してきたこの二つの茶の湯文化の位置関係を、同じものさしで明らかにするためである。

考察結果をここで再度整理しておく。「貴紳の茶の湯」と「流儀の茶の湯」という二つの茶の湯文化をあらわす言葉を近世の茶の湯にまで拡大するならば、本稿で論じた内容は、つぎのようになるだろう。

近世前期には、「貴紳の茶の湯」がおこなわれた武家層では、儀礼としての茶の湯をつかさどる職業的茶の湯技芸者、すなわち「茶堂」が必要とされた。のちに、「家元」として成長する千家も、大名家に「茶堂」として出仕した。

近世中期には、家元は、富裕町人農民層に勢力を広げ、数多くの門弟を組織したヒエラルキーの頂点に、茶の湯指導者として君臨した。これが実質的な「流儀の茶の湯」の誕生である。すなわち、近

世において家元は二つの顔をもっていた。一つは「貴紳の茶の湯」における「茶堂」であり、もう一つは「流儀の茶の湯」における「家元」であった。茶の湯の「近世家元システム」は、このような二重構造に立脚するものであった。その結果、幕末期には、家元は、近世初期からの願望である「天皇への茶献上」を実現し、「天皇との距離」を近づけることに成功する。これは、当時の家元の実力を示すものでもある。この近世末期に一定の達成をみた家元の天皇への志向性、それは千宗旦にもみられたように近世初期以来のものであるともいえるが、現在では皇室との姻戚関係という状況で現実のものとなったのである。

しかしながら、近世末期から現代に至るまでの道程は、それほど単調ではなかった。その後の歴史の展開は、そのまま「天皇との距離」をより近づけていく方向には運ばなかったのである。明治維新後、家元は低迷期をむかえることとなる。その理由の一つは、「貴紳の茶の湯」における「茶堂」という基盤を失ったことにある。「貴紳の茶の湯」が先導した明治期の茶の湯復興期には、「天皇との距離」が近い位置に「貴紳の茶の湯」が厳然として存在した。社会的地位を低下させた家元は、天皇への志向性を失ってしまったようにも思える。そして、「貴紳の茶の湯」における旧来の「茶堂」として行動するのが家元の姿であった。

その後、大正・昭和初期に至って状況の変化がみられる。そのこ

ろまでに「流儀の茶の湯」も徐々に復興し、家元も着実に勢力をのばしていた。しかし、その実力にもかかわらず、幕末に強く念願された「天皇との距離」を、この時期の家元は、まだそれほど意識していなかったようである。逆に皇室側からの積極的な働きかけによって「皇族への献茶」が実現し、「天皇との距離」が再び現実のものとなるのである。熊倉功夫は、昭和初期の家元の状況を、つぎのように表現している。

戦争による崩壊をまたずとも、茶道界は財界の数寄者の手を離れていた。もはや茶道界にとつての支持者は、財界ではなく大衆であり、大衆によって保護される茶の宗匠ではなく、ここには大衆を指導する宗匠の姿があった<sup>(1)</sup>

そして、第二次世界大戦敗戦と戦後改革の結果、身分社会は崩壊した。すでに力を失っていた「貴紳の茶の湯」と成長する「流儀の茶の湯」との力関係の逆転は、白日の下にさらされる結果となったのである。これ以降、「貴紳の茶の湯」は事実上存在しえなくなり、「流儀の茶の湯」の全盛期となる。家元は、「文化的貴族」として、茶の湯文化の頂点に立つ存在となった。しかし、その存在感の大きさが、家元は封建遺制であるとの批判をまねくことともなった。

以上が、本稿において概観した「近代における」茶の湯家元の歴史である。ただし、結果的に実現した、「絶対的な」茶の湯指導者としての地位を、家元がみずから積極的に利用するようになるには、もう一段の成長とそのための時間が必要であつたように思われる。現代の家元は、大正・昭和初期の家元のあり方とも異なる存在に、より大きく成長しているのである。

## 注

引用文中の漢字は原則として通用のものにあらためた。

家系、生没年、事績等については、霞会館諸家資料調査委員会編『昭和  
新修華族家系大成』上下巻（霞会館、昭和五十七年（一九八二））、『人事  
興信録』（人事興信所、各版）などを参照した。

(1) 家元制度の成立時期の諸説については、拙論「茶の湯の流派維持の  
あり方―組織論と点前論の観点から―」『藝能史研究』第一七一号、藝能  
史研究会、平成十七年（二〇〇五）、二〇～三七頁において論じた。

(2) 数寄屋御成については、矢部誠一郎『日本茶の湯文化史の新研究』  
雄山閣、平成十七年、一七九～一九八頁参照。なお、初出は、『茶湯』第  
三号、木芽文庫、昭和四十五年（一九七〇）。

(3) 神津朝夫『茶の湯の歴史』角川学芸出版、平成二十一年（二〇〇九）、  
二〇七頁参照。

(4) たとえば、谷端昭夫『チャート茶道史』淡交社、平成七年（一九九五）、二二四～二二五、二二〇～二二二頁。ただし、谷端昭夫は、「わび茶」、「大名茶」以外に、「貴族の茶」という類型を想定している。

(5) 西山松之助『家元の研究』『西山松之助著作集』第一巻、吉川弘文館、昭和五十七年（一九八二）参照。

(6) これについては、「近代数寄者の茶」という表現が一般的である。しかし、隠者的な印象のある「数寄者」という言葉では、実態をあらわすのに不十分と考える。

(7) ただし、そのことから、彼らが「茶の湯の点前や作法」には一向無頓着だった（熊倉功夫『茶の湯といけばなの歴史』左右社、平成二十一年（二〇〇九）、二二二頁）と考えるのは早計であろう。

(8) 明治期における伝統芸能の復興における「天覧」の意義は、能楽と歌舞伎とを対比すると、より明らかとなる。能楽は、明治九年（一八七六）岩倉具視邸において天覧能がおこなわれた。能楽自体は、江戸時代から宮中でおこなわれており、明治天皇自身も好んだことから、天覧自体には問題はなかった。それに対して、庶民の芸能であるとして評価が低い歌舞伎は、明治十三年（一八八〇）寺島宗則邸における天覧歌舞伎の計画が岩倉具視の反対で中止され、明治二十年（一八八七）井上馨邸において天覧茶会と置きあわせにより、ようやく天覧が実現した（『藝能史研究會編』『日本芸能史』第七巻、法政大学出版局、平成二年（一九九〇）、二三～三八頁参照）。なお、この「天覧」による芸能認知システムは、昭和三十四年（一九五九）の野球の天覧試合まで生きていたといえる。

(9) 禁中茶会は二回おこなわれ、有名な黄金の茶室を搬入したのは、翌

天正十四年（一五八六）一月のことである。

(10) 桑田忠親『千利休研究』東京堂出版、昭和五十一年（一九七六）、一一〇頁。

(11) 『利休大事典』淡交社、平成元年（一九八九）、六七頁。

(12) 千宗旦の手紙に「国母様御用被仰下候」と記されている（『新編元伯宗旦文書』表千家不審庵文庫、平成十九年（二〇〇七）、二五二頁）。

(13) この経緯は、千宗旦の手紙に記されている（前掲『新編元伯宗旦文書』二六五頁）。

(14) 千宗旦は、東福門院からの下賜を「町人如何様義、無之由候」（町人にこのようなことがあるのは、例がないとのこと）と記している（前掲『新編元伯宗旦文書』二六五頁）。この口吻からは他にも事例がないわけではないと考えられる。

(15) 『普公茶話』『茶道全集』巻十一、創元社、昭和十二年（一九三七）、七二頁。

(16) 前掲『普公茶話』七二二頁。なお、句読点は引用者がおぎなった。

(17) 千宗員（而妙斎）「不審庵の代々」『日本の茶家』河原書店、昭和五十八年（一九八三）、五二～五三頁。

(18) 井口海仙「今日庵の代々」前掲『日本の茶家』八二～八三頁。

(19) 表千家は紀州藩徳川家、裏千家は加賀藩前田家、のちに伊予松山藩久松松平家、武者小路千家は高松藩松平家に、それぞれ出仕した。

(20) 「大給松平家側の系図には、のちの玄々斎宗室とおぼしき人物が見当たらない」（熊倉功夫『近代茶道史の研究』日本放送出版協会、昭和五十五年（一九八〇）、一〇一頁）という指摘がある。榎元半重著『大給

龜崖公伝」(大給恒の伝記) 明治四十五年(一九二二)には、「家庭雑話」のなかに「高祖乗友公の末男千家宗匠」(同書、三三二頁)と記載があるので、大給家が事実として認めていないわけではない。

なお、『今日庵月報』明治四十一年(一九〇八)創刊号には、「祝詞伯爵 大給恒」とある。内容は「今日庵月報発刊ヲ祝ス」(同号二頁)という言葉だけであるが、両者の関係がうかがえる。

(21) 「従来の点前を整理して段階づけ、点前における新しい秩序をつくりだした」(熊倉功夫、前掲『近代茶道史の研究』一一四頁)と指摘がある。

(22) 筒井絃一「茶会記による玄々斎精中宗室居士とその交友」『玄々斎精中宗室居士』淡交社、昭和五十一年(一九七六)、一一七～一二三頁。

(23) 井口海仙「精中居士を思う」前掲『玄々斎精中宗室居士』六九～七〇頁。

(24) 筒井絃一、前掲論文、一三五～一四〇頁。

(25) 筒井絃一、前掲論文、一三〇～一三四頁。

(26) 「意図的に玄々斎が、禁裏公家社会への交渉を深めようとした」(熊倉功夫、前掲『近代茶道史の研究』一一二頁)と指摘がある。

(27) 『茶道の源流』第六巻資料篇、淡交社、昭和五十八年(一九八三)、六三～六四頁。なお、明らかな翻刻の誤りは訂正した。

(28) 同右書、六四頁。

(29) 同右書、六六～六七頁。

(30) 「今日庵の禁裏茶献上を傍証する史料を、今見出せぬ」(熊倉功夫、前掲『近代茶道史の研究』、一一三頁)と指摘がある。なお、十九世紀はじめに成立したと考えられる『茶祖的伝』においては、東福門院と千宗旦

との関係を「門院侍女をして茶道を翁に問せ給ふ。此侍女元伯翁の後妻となる。真巖宗見大姉是也」とのべ、その割注に「門院御入門」とあるので、東福門院が千宗旦に学んだように説明している(木芽文庫編『茶湯』六号、思文閣、昭和四十八年(一九七三)、五三頁)。しかし、「元伯宗旦文書」をみるかぎり、それは事実として信じがたい。

(31) 桑田忠親、前掲書、一一二頁。

(32) 濱本宗俊は、この点を正しく指摘している(濱本宗俊『玄々斎の遺風』前掲『玄々斎精中宗室居士』九八頁)。

(33) たとえば、「天皇に献茶を奉仕した」(井口海仙、前掲『今日庵の代々』一〇五頁)、「禁中への献茶」(筒井絃一、前掲論文、一一三頁ほか)というような表現がおこなわれている。これらによれば「茶献上」でなく「献茶」であると誤解されるおそれがある。

(34) 熊倉功夫、前掲『近代茶道史の研究』一一四頁。

(35) 千玄室(又妙斎)、千宗室(円能斎)共編、福田錦松堂。

(36) 前掲『茶道の源流』第六巻、一二七頁。

(37) 谷見「近代の藪内家」藪内紹智(竹中)監修『藪内流の茶道』古儀茶道藪内流竹風会、平成二十年(二〇〇八)、七八頁。なお、同書、一二八頁では、安政五年(一八五八)の書状と解している。

(38) 筒井絃一、前掲論文、一三五頁。

(39) 熊倉功夫、前掲『近代茶道史の研究』一二五頁。

(40) この「天覧茶会」の背景として、貴紳の茶の湯の一定の復興が実現していたことが考えられる。有栖川宮職仁親王の日記を分析した秋元信英は、つぎのとおり、明治十六年(一八八三)に「皇族の数寄屋御成」

(後掲論文、三二二頁) というべき着想があったこと、それが「茶道文化史上の新しい兆候」(後掲論文、同頁) であると指摘する。

(明治天皇の政府大官への行幸は) 王政復古の功臣への恩恵であった。旧時代にあった將軍の「御成」が行幸にかわったのであった。おそらく、これがモデルとなり、言わば茶席開に皇族の最高位で茶の湯に堪能な記主(有栖川宮熾仁親王——引用者注)を迎える着想が生じた。(秋元信英「『有栖川宮熾仁親王日記』の茶道文化史的特質」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』第一号、平成二十一年(二〇〇九)、三二三頁)

すなわち、明治期の天皇・皇族との茶の湯のかかわりは、復興する貴紳の茶の湯の担い手たちが、天皇・皇族を茶の湯に巻き込んでいこうとした現象と評価すべきものである。

(41) 『明治天皇紀』第六、吉川弘文館、昭和四十六年(一九七二)、七三七～七三八頁。

(42) 『世外井上公伝』第三卷、内外書籍、昭和九年(一九三四)、八〇四頁。

(43) 同右書、八〇八頁。

(44) 同右書、八〇三頁。

(45) このとき明治天皇に同行した有栖川宮熾仁親王は、当日の日記に

廿六日晴

一外務大臣伯井上馨、麻布烏居坂邸へ午後一時御出門聖上臨幸ニ付  
案内行向、演劇御覽、同十時還幸、直二帰館、陸軍歩兵大佐小川又  
次面謁之事、

とだけ記している(『熾仁親王日記』卷四、高松宮、昭和十一年

(一九三六、四九二頁)。

なお、井上馨の案内状を、四月二十二日条に記しているが、その内容には茶席にも歌舞伎にもふれられていない(同書、四九〇～四九二頁)。

(46) 熊倉功夫、前掲『近代茶道史の研究』二二五頁。

(47) この行幸が茶の湯の復興の契機であるとか、その復興の象徴であるとするならば、井上馨自身がその功を吹聴したたのであるはずである。しかしながら、井上馨と茶の湯を介して親しく交際していた高橋義雄は、たとえば「茶道読本」のなかの「維新前後の茶道」、「明治中期以後の茶事」(秋豊園出版部、昭和十一年、五八～六三頁)において、なにもふれていない。

(48) 熊倉功夫、前掲『近代茶道史の研究』二二五頁。

(49) 熊倉功夫、前掲『近代茶道史の研究』二二七頁。

(50) 『毎日新聞』明治二十年四月二十八日の記事。なお、ルビは省略した(『復刻版横浜毎日新聞』第四十九巻～第五十二巻、不二出版、平成五年(一九九三))。

(51) 『萬象録 高橋箒庵日記』卷四、思文閣出版、昭和六十三年(一九八八)、三八四頁、大正五年(一九一六)十月二十八日条。

(52) たとえば、益田孝、益田克徳、益田英作、馬越恭平、近藤廉平らはその教えを受けた。

(53) 明治十年(一八七七)八月二十一日、第一回内国勸業博覧会への行幸において、明治天皇に対して「旧龍野藩主脇坂安斐点茶を献る」(『明治天皇紀』第四、吉川弘文館、昭和四十五年(一九七〇)、二四三頁)という事例がある。これについては、別の機会にくわしく論じることとしたい。

(54) 『京都博覧会沿革誌』中巻(京都博覧協会編纂、明治三十六年



(一九〇三)によると、明治二十年(一八八七)は、孝明天皇二十年祭にあたるため、天皇皇后の京都行幸啓があり、新古美術会にも行幸啓があったものである(同書、二三五頁)。「抹茶、煎茶ノ二席ヲ設ケ」(同書、二三七頁)と記されているが、天皇への献茶の記録はこのされていない。

(55) 鈴木半茶「二茶会記に見る時代相」『わび』昭和十六年(一九四一)八月号、河原書店、三六―三七頁。鈴木半茶は、「苑内博覧会場とあるのは、名古屋博物館苑内のことと思はれる」(同書、三七頁)と記しているが、あやまりであろう。

(56) 明治四年(一八七二)の京都博覧会は、三井八郎右衛門、小野善助および熊谷久右衛門の三人を会主として開催された(前掲『京都博覧会沿革誌』上巻、一頁)。明治五年(一八七二)に京都博覧会社が組織されたときも、三人の会主はひきつがれた。なお、三千家および藪内家は、そこでは「補助出勤」という役割を担った(前掲『京都博覧会沿革誌』上巻、三、四、六頁)。

(57) 同校は、明治五年(一八七二)に新英学校及び女紅場としてはじまり、明治十五年(一八八二)に京都府女学校、明治二十年(一八八七)に京都府高等女学校、明治三十七年(一九〇四)に京都府立第一高等女学校、大正十二年(一九二二)に京都府立京都第一高等女学校とそれぞれ名称をあらため、昭和二十三年(一九四八)には京都府立鴨沂高等学校となり、現在に至っている(小林善帆「皇后宮陛下臨御」の風景」『茶道雑誌』平成十九年(二〇〇七)四月号、河原書店、一二〇頁)。

(58) 『京都鴨沂会雑誌』第三号、鴨沂会、明治二十三年(一八九〇)、五〇―五一頁。なお、この資料の所在については、小林善帆氏から教示をえた。

記して感謝申し上げる。

(59) 明治二十年(一八八七)の事例が表千家であり、この場合は裏千家であることについて、小林善帆は、当時千玄室(又妙斎)は同校の茶儀囑託教授であったためであるとして、その経緯をつぎのとおり説明している。

同校の「茶」「花」に関する教員(囑託教授)については、明治十一年(一八七八)一月に千宗左(碌々斎)、明治十二年十月に池坊専正が採用されています。その後「茶」の教員は、明治二十二年五月、千宗左から千玄室(又妙斎)に代わっています。「皇后宮陛下臨御」において点前が千玄室によるものであったのは、そのためだったのでしよう。(小林善帆、前掲論文、一二三頁)

(60) 『明治天皇紀』において、明治二十年二月一日条(前掲『明治天皇紀』第六、六九〇―六九一頁)、明治二十三年四月二十七日条(『明治天皇紀』第七、吉川弘文館、昭和四十七年(一九七二)、五四一頁)とも、行幸または行啓の記録はあるが、喫茶にはふれていない。

(61) 『今日庵月報』第三卷第十号、明治四十四年(一九一一)七月、八頁。なお、本文引用について詳細な会記が記載されている。

(62) 安田善次郎『松翁茶会記』下巻、昭和三年(一九二八)、四〇一―四〇二頁。

(63) 前掲『今日庵月報』第三卷第十号、五頁。

(64) 千宗室(円能斎)の妻つな子は、旧三田藩士西貢の娘であり、西貢の妻が三田藩主九鬼隆徳の娘である(『三田市史』第四卷近世資料、三田市、平成十八年(二〇〇六)、六三―六四頁)ので、藩主の九鬼家の遠縁にあたる。また、九鬼隆一の生家の星崎家と西家とは姻戚関係にある(辻田無

茶士「九鬼男と今日庵」「茶道月報」昭和六年（一九三二）十月号、八八頁。

- (65) 九鬼隆一は、本文後述の大正三年（一九一四）の千宗室（円能斎）の銀婚式に来賓祝辞をのべ（『今日庵月報』第六卷第七号臨時増刊「銀華記念号」大正三年、一〇頁）、千宗室（淡々斎）に「淡々斎」の号を授ける（前掲『茶道月報』昭和六年十月号、八八頁）など、裏千家との関係が深い。

- (66) 本文Ⅲ3（2）参照のこと。

- (67) これらのほか、明治四十二年（一九〇九）十一月二十六日、「久松家に於定室上京に付臨時御茶事の御催あり被召」と記録がある（『今日庵月報』第二卷第四号、明治四十三年（一九一〇）一月、一二頁）。

- (68) 『今日庵月報』第一卷第八号、明治四十二年五月、一二頁。

- (69) 前掲『今日庵月報』第六卷第七号臨時増刊「銀華記念号」、二頁。

- (70) 千宗左（即中斎）「浅春記」「わび」昭和十四年（一九三九）三月号、三〜四頁。なお、昭和十四年四月十七日には、表千家家督披露お茶事に、紀州家当主徳川頼貞夫妻を迎えている（「紀州侯のお成り」「わび」昭和十四年五月号、五六〜五八頁）。

- (71) 安田善次郎『松翁茶会記』中巻、昭和三年（一九二八）、二五八頁。

- (72) 大正天皇の養育係ともいえる明宮祇候（明宮勤務）は、大正天皇の生まれた明治十二年（一八七九）から明治二十一年（一八八八）におよんでいる（『松浦詮伯伝』第二巻、松浦伯爵家編修所、昭和五年（一九三〇）、一九五〜二二四頁）。また、明治二十一年から翌年にかけて、常宮昌子内親王（明治天皇の第六皇女、ただし、事実上の長女）の御降誕御用掛および常宮御養育主任をつとめている（同書、二二五〜二三九頁）。

- (73) 明治十七年（一八八四）華族令制定時の経緯を松浦家では、つぎのとおり伝えている。

御当家伯爵之御事は、初メ官之調べハ子爵之調べなりし由なるに、御授爵之前日、太政大臣三条実美公々、嵯峨実愛卿に、松浦は中藩なりと思ひしに、授爵之調べハ小藩子爵之撰定となれり。若し間違ては遺憾なれば、内々問合せよと、御内意ありし由、（略）更に調べかえにて、中藩伯爵にならせられしとぞ。（前掲『松浦詮伯伝』第二巻、二〇二頁）

- (74) すこし時代は下がるが、大正五年（一九一六）時事新報社が調査した「全国五十万円以上資産家表」によると、東京府の欄では、松浦厚は財産見込額千万円とある（同額の者が八名いる）。財産見込額千万円を上回る人物は二十三名、そのうち大名華族は前田利為、島津忠重、徳川頼倫の三名であることから、その富裕さがうかがえる（『大正昭和日本全国資産家地主資料集成Ⅰ』柏書房、昭和六十年（一九八五）、六頁参照）。

松浦家の経済力の背景には、旧領地の一寒村にすぎなかった佐世保に明治二十二年（一八八九）鎮守府がおかれ、軍港として発展したことがあると考えられる。明治三十二年（一八九九）に確定した松浦家永世基本財産の総額八〇万円の内訳は、十五銀行株式二十万円、その他株式計十万円、東京向柳原邸一万四千坪十五万円、田地百町十万円に対し、佐世保市街地三万坪二十五万円と、その比重は大きい（前掲『松浦詮伯伝』第二巻、三一九頁）。

- (75) 「しげのぶ」と記されることが多いが、織豊時代から江戸初めの当主である初代藩主も松浦鎮信であり、区別のために、松浦家では「ちんしん」

と音読みしている。なお、「松浦」の姓は、「まつら」と読むのが正しい。

(76) 松浦素『茶湯由來記』浪速社、昭和四十四年（一九六九）、三二頁。

(77) 『心月庵と鎮信流茶道』松浦伯爵家編修所、昭和九年（一九三四）、二三頁。

(78) 高橋義雄は、「西南戦争後、社会の秩序の漸く鎮静するに随つて、明治十三年頃より、ほつ／＼茶人が頭を抬げ始めた」（高橋義雄『筈のあと』上巻、秋豊園出版部、昭和十一年（一九三六）、一九八―一九九頁）とのべている。また、安田善次郎が『松翁茶会記』を記しはじめたのも、明治十三年（一八八〇）である。

しかし、高橋義雄は、「明治十年西南戦争が終局して、人心漸く安定するに及んで、茲に始て茶事復興の端を開き、所々に茶会を催す者が出現した。此時に当つては、諸大名没落の後とて、茶事を云々する者は民間の宗匠のみに止まり、其茶風も亦自ら低級にして、名物茶器を使用するは我等の事にあらずなど称して（略）明治十二年頃の茶会記を見れば、大正昭和に於ける諸家の茶会に比し、其低級さに驚く程であつた。而して此頃復興茶会の先陣を動めた茶人は、東都に於ては松浦詮、渡辺驥、小西義敬、益田克徳、安田善次郎、大住清白等、其他数人を数え得る」（高橋義雄『茶道読本』秋豊園出版部、昭和十一年、五九―六〇頁。傍線引用者）とものべている。前半部分からは茶の湯の復興は「民間の宗匠」によるものとなるが、後半部分に列記された人名からは、その説明が妥当であるとは思えない。その後の時代と対比する必要上、意図的な文飾であらう。

ちなみに、渡辺驥は司法官僚で大審院検事長、小堀家伝来の茶道具購入でも知られる。小西義敬は郵便報知新聞の創業者、益田克徳は益田孝の次

弟である実業家（東京海上保険株式会社総支配人ほか）、安田善次郎は安田財閥の創始者、大住清白は菓子舗風月堂主人である。

(79) 前掲『心月庵と鎮信流茶道』二六―二七頁。

(80) 石黒況翁は、和敬会の創立を明治三十三年（一九〇〇）としている（熊倉功夫、前掲『近代茶道史の研究』、二一〇頁参照）。しかし、引用文のとおり、明治三十一年（一八九八）が正しいと考えられる。松浦詮は、和敬会規約を「己亥七月」（熊倉功夫、前掲『近代茶道史の研究』、二一〇頁）に記しており、これは明治三十二年（一八九九）にあたる。また、『松翁茶会記』における「和敬会」の初見は、明治三十二年九月二十日（前掲『松翁茶会記』中巻、一八六頁）である。以上から、すくなくとも明治三十三年創立はありえない。

(81) 前掲『心月庵と鎮信流茶道』五三―五四頁。なお、ここに掲載された人物像は以下のとおりである。青地幾次郎…札差（伊勢屋）、実業家（東京板紙株式会社監査役）。石黒忠恵…子爵、陸軍軍医総監、貴族院議員。伊藤雋吉…男爵、海軍中将、貴族院議員。伊東祐磨…子爵、海軍中将、貴族院議員。岩見鑑造…実業家（株式会社東京商工銀行取締役）。金澤三右衛門…御用菓子司、実業家（醗酵社（桜田ビル）社長）。戸塚文海…海軍軍医総監。東胤城…子爵、旧近江三上藩主。東久世通禧…伯爵、旧公家、貴族院副議長、枢密院副議長。久松勝成…旧伊予松山藩主。松浦恒…平戸藩松浦家分家。三田葆光…国学者、東京女子師範学校教諭。三井高保…男爵、三井室町家当主、三井銀行総長（社長）。安田善次郎…注（78）参照。岡崎惟素…三菱財閥系の実業家（東京株式取引所肝煎、日本通業株式会社取締役）。三井八郎次郎…男爵、三井南家当主、三井物産社長。瓜生震…

三菱財閥系の実業家（汽車製造株式会社社長）。吉田丹右衛門…質商（佐野屋）、実業家（旭日生命保険株式会社取締役）。馬越恭平…大日本麦酒株式会社社長、貴族院議員。益田孝…男爵、三井物産社長。竹内專之助…織物商。

(82) 前掲『松浦詮伯伝』第二卷、三〇二―三〇三頁。

(83) 『松浦詮伯年譜』松浦伯爵家編修所、昭和二年、一二四頁。

(84) 前掲『松浦詮伯伝』第二卷、三二二頁。

(85) 前掲『松浦詮伯伝』第二卷、三四二頁。

(86) 前掲『松浦詮伯年譜』八五頁。

(87) 前掲『松浦詮伯年譜』九七頁。

(88) 前掲『松浦詮伯年譜』九八頁。

(89) 前掲『松浦詮伯伝』第二卷、二六七頁。

(90) 前掲『松浦詮伯伝』第二卷、三一〇頁。

(91) 前掲『松浦詮伯伝』第二卷、三二二頁。

(92) 前掲『松浦詮伯伝』第二卷、三三二頁。

(93) 前掲『松浦詮伯伝』第二卷、三四四頁。つぎの二つの引用も同書同頁。

(94) 松浦詮の千家に対する印象を示すものとして、明治三十二年（一八九九）十一月七日および八日訪問時の記述を省略せずに掲載する。

正午、千宗左を音問す。主の隠者、中潜まで出迎へたり。石径幽に存して、歩々古色を帯び、流石に世に響きたる名家なれば、見所多きは独り庭園のみならざりき。

午下、千宗室に招かる。又隠といへる草庵に案内せり。櫺園翁は、隠れても其名は朽ちぬ草の菴をうら珍しく今日見つる哉

と咏み出でぬ。（前掲『松浦詮伯伝』第二卷、三二二頁および三三二頁）

(95) 引用は、ともに前掲『松浦詮伯伝』第二卷、三四五頁。

(96) 前掲『松浦詮伯伝』第二卷、三四五―三四六頁。

(97) 「貴紳の茶の湯」側からの千家に対する評価について、たとえば大正十年（一九二一）から昭和元年（一九二六）に刊行された高橋義雄編『大正名器鑑』第一編（第九編、大正名器鑑編纂所におけるあつかいが参考になるだろう。ここには茶入と茶碗が収録されているが、松浦家、藪内家、表千家、裏千家各所蔵品数は、左記の表のとおりである。松浦詮が藪内家を高く評価し、表千家、裏千家についてそれほど関心を示していないことの理由が理解できよう。

種別	掲載総数	松浦家所蔵	藪内家所蔵	表千家所蔵	裏千家所蔵
茶入	四三六	九	三	〇	〇
茶碗	四三九	五	八	三	〇
合計	八七五	一四	一一	三	〇

なお、高橋義雄は、藪内家に対して、「利休の遺物が其血縁ある表裏千家に少くして、却つて多く藪内家に伝存するは、千家には種々の事故ありて伝来品の散逸せし場合多きに反して、藪内家は代々堅実に其箕裘を守り、滄桑変革の際と雖も、泰然不動の態度を持続したるが為めならん」（高橋箒庵『大正茶道記』一、淡交社、平成三年（一九九二）、二四六頁）と述べている。

(98) 引用は、前掲『松浦詮伯伝』第二卷、三九四頁、四二八頁、四三〇頁。

(99) 明治三十四年（一九〇一）六月の千家訪問では、松浦詮に同行している（前掲『松浦詮伯伝』第二卷、三四四頁）。

- (100) 出典は、前掲『松浦詮伯伝』第二巻、三九五、四一五、四三一、四四二、四四八頁。なお、石塚宗通については、同書、三七三頁参照。
- (101) 前掲『松翁茶会記』下巻の巻末にある高橋箒庵「跋」、一―二頁。
- (102) 明治三十六年（一九〇三）三月十一日「三井氏別荘に於ける千家宗近<sup>匠</sup>の茶事」に安田善次郎は客となっている。（前掲『松翁茶会記』下巻、三〇四頁）なお、若干関係するものとして、明治四十一年（一九〇八）十二月三日に千家宗道氏<sup>宗</sup>から相伝を受けている事例（前掲『松翁茶会記』下巻、三六八頁）、明治四十四年（一九一一）五月三日「千家出張所（三井家茶室）の茶事」という事例（前掲『松翁茶会記』下巻、三九八頁）がある。
- (103) 明治三十八年（一九〇五）五月十日「番町三井氏の茶事、千宗左、小松浦、桑原、大久保の諸氏と余」（前掲『松翁茶会記』下巻、三三九頁）がある。ただし、『松翁茶会記』には記載がないが、大正四年（一九一五）三月二十三日、安田善次郎の茶会に高橋義雄が招かれた際、「表千家宗匠」が相客となっている事例がある（『萬象録 高橋箒庵日記』巻三、思文閣出版、昭和六十二年（一九八七）、九六―九七頁）。
- (104) 高橋箒庵、前掲『大正茶道記』一、一二七―一二八頁。
- (105) 高橋箒庵『昭和茶道記』一、淡交社、平成十四年（二〇〇二）、六五四―六五五頁。なお、余は大正初年先代円能斎宗匠を訪問して以来、久しく無沙汰して居た」（同書、六五四頁）とあるが、これは大正四年（一九一五）のことであろう。
- (106) 高橋箒庵『東都茶会記』二、淡交社、平成元年（一九八九）、三三五頁。なお、前掲『萬象録 高橋箒庵日記』巻三、一二三四―一二三五頁、大正四年（一九一五）六月十七日条に具体的な記述がある。
- (107) 千宗室（円能斎）は、大正五年（一九一六）四月二十四日に高橋義雄を訪問している。「午後、裏千家宗匠千宗室来宅、藤谷宗中、八田円斎白紙庵にて接待、藤谷薄茶を点ぜり」（前掲『萬象録 高橋箒庵日記』巻四、一三五頁）とある。
- (108) 松浦詮の茶の湯振興には、「千家家元の依頼もあつ」（松浦祥月「鎮信流茶道」前掲『日本の茶家』四六八頁）たという。
- (109) 「肥満の人であつたために茶に親しむことができず、専ら貴族院において政治に専念した」（松浦祥月、前掲『鎮信流茶道』四六八頁）。また、「鸞州<sup>マウ</sup>伯爵は吾れ五十に達せざれば、自ら茶事を為さずと常々言はれたる由」（高橋箒庵『東都茶会記』一、淡交社、平成元年（一九八九）、二八一頁）とも伝えている。
- (110) 前掲『松翁茶会記』中巻、一八五頁。
- (111) 松浦祥月、前掲『鎮信流茶道』四六八―四六九頁。なお、松浦素<sup>ちうとく</sup>（明治四十五年（一九一二）―昭和五十六年（一九八一）、号祥月）は、松浦陸の長子である。
- (112) この後段の記述に関して、筆者は、松浦治子の娘である正親町舒子氏（大正十年（一九二一）―）に聞き取り調査をした（平成二十年（二〇〇八）六月十三日）。正親町舒子氏は、つぎのとりのべられた。
- 前の皇后様がまだお嫁入り前に久邇宮家にいらしたころ、結婚前の女の方に男は絶対、おそばに寄れなかったのですね、それで祖母（松浦益子）がお相手に上がっていたのですね、どのくらい遊ばしたのかは知りませんが、しばらくは鎮信流を遊ばしていた。それで今度照宮



様に自分と同じ流儀がいいからと、そのときはやはり如月公(松浦隆)ではだめだと、それで母が、あの東久邇宮様と御成婚になるまで上がっていて、それから戦争があったもので。

(御所から) お迎えが来て、呉竹寮で。いつも皇后様は、照宮様がお点でになったお茶をすくお楽しみで召し上がって、皇后様もお喜びだったようです。

それから、三笠宮妃殿下もお嫁入り前に、百合君様が、そちらは巢鴨(松浦邸)にお通いくださって、しばらく。それは貞明皇后が香淳皇后と同じが良からうとおっしゃって。(貞明皇后は)学習院に参観にいらして、まあ、妃殿下になりそうな方をちゃんとはじめに印をしておいて、各教室をごらんになったのですね。それで貞明皇后が妃殿下をお選びになったのです。それで、お茶を少しならうようにおっしゃって、それで、巢鴨の家に、(戦災で)焼ける前でしたから。下から坂を上がったところにお茶室があって、(百合君様は)毎週お通いになりました。それもちょっとした間だけでしたけれどもね。

なお、正親町舒子氏によれば、孝宮(のち鷹司和子)は戦争中のために稽古することはなく、順宮(のち池田厚子)および清宮(のち島津貴子)は、巢鴨松浦邸で稽古されたとのことである。

(113) 『松浦厚伯伝詩文鈔』松浦伯爵家編修所、昭和十四年(一九三九)、八七〜八八頁。

なお、久邇宮良子女王の茶の湯指南役の決定経緯は、『萬象録 高橋箒庵日記』巻六、思文閣出版、平成元年(一九八九)、二四七〜三〇四頁に、つぎのようにくわしく記されている。

まず、良子女王が石州流を学びたいと希望し、母親である幌子妃は、実姉の夫松平直亮(松平不昧の後裔)に紹介を依頼した。そこで松平直亮は、高橋義雄を訪問して相談した。高橋義雄は、石黒忠恵らに尋ねたところ、石黒忠恵は、石州流には鎮信派と怡溪派との両派があり、鎮信派なら松浦夫人がふさわしい、怡溪派なら山本麻溪に問い合わせたらよいと答えた。そこで高橋義雄は、山本麻溪に問い合わせをした(大正七年(一九一八)七月二十五日条)。山本麻溪から二名の推薦があり、それを松平直亮に伝えた(同年八月七日条)。高橋義雄は、候補者のうち伊達未亡人(松浦詮の娘)について、稲葉正繩(松浦詮の子)を介して交渉することとした(同月二十五日条)。高橋義雄は、稲葉正繩を訪問して相談するが、別人を推薦される(同月二十八日条)。松平家から、稲葉正繩が推薦する人物に依頼が可能かどうかの照会があり、高橋義雄は稲葉正繩に連絡する(同年九月六日条)。稲葉正繩から当人了承の旨の報告がある(同月七日条)。松平直亮は、高橋義雄を訪問し、当人との面会を希望する(同月十二日条)。松浦家家扶が高橋義雄を訪問し、松平家からの依頼を一応辞退したが、再度松浦夫人に依頼されたいと申し出る。高橋義雄は直ちに松平家にもむき、事情を説明する。その結果、松平家から再度松浦夫人に依頼することとなる(同月十四日条)。高橋義雄は、松浦家を訪問して承諾をえ、松平直亮に報告する。高橋義雄は「此問題も今日漸く落着して当初の考案通り松浦伯夫人が教授と為りたるは無上の好都合なり。さるにても未来の皇后陛下たるべき久邇宮姫君が、其御婚嫁前に当りて特に茶道を御練習遊ばさる、思召は従来聞き及ばざる所にして、兎に角斯道の為めには近來の美事と称して可ならん」と結んでいる(同月十八日条)。本文引用文中の「再応」



には以上のような経緯があったのである。

(114) 前掲『松浦厚伯伝詩文鈔』九二頁。

(115) 表千家では、昭和十年（一九三五）に第十二代千宗左（惺斎）長男与太郎が子爵北小路資武（公家名家）の娘と結婚（「不審庵の慶事」『茶道月報』昭和十年七月号、二九頁）。藪内流では、昭和十年にのちの第十二代藪内紹智（竹風）が男爵安藤直義（旧紀州藩家老後裔）の姉と婚約（「茶界消息」『茶道月報』昭和十年十月号、六八―六九頁参照）、のち結婚。宗徧流では、昭和十一年（一九三六）にのちの第十代山田宗徧（成学）が子爵水野忠泰（旧沼津藩主後裔）の妹と結婚（野村瑞典『宗徧流 歴史と系譜』光村推古書院、昭和六十二年（一九八七）、三二六頁）。裏千家では、昭和十九年（一九四四）に千宗室 淡々斎 次女良子が子爵桜井忠養（旧尼崎藩主後裔）と結婚（『新版茶道大辞典』淡交社、平成二十二年（二〇一〇）、一三二頁）などの事例がある。

(116) 裏千家は、明治四十一年（一九〇八）十一月から『今日庵月報』という機関誌を発行している。大正十一年（一九二二）六月号からは、その名称を『茶道月報』とあらためた。なお、昭和三十一年（一九五六）十二月号で廃刊し、昭和二十二年三月に創刊された同じく裏千家の機関誌である『淡交』に併合された。

(117) 千宗室（円能斎）の葬儀について、『茶道月報』大正十三年（一九二四）九月号円能斎追悼号には、つぎのとおり記されている。

本葬当日の重なる会葬者は池松京都府知事を初め大村彦太郎、湯浅七左衛門、九条幾子、千宗左、千宗守、藪内紹智、谷川茂庵、野村徳七、松風嘉定、今日庵老分諸氏を初め遠近の諸名士実業家全国の社中

等約二千名に達した。（同書、一一二頁）

これによって、裏千家がその存在感を世間に示したことは、想像にかたくない。

(118) 「皇后宮への御献茶の儀」『茶道月報』大正十四年（一九二五）一月号。引用は、前半が四頁、後半が五頁。なお、原文は総ルビであるが、ルビは省略した。

(119) 裏千家が選択された理由として、貞明皇后の実母である九条（野間）幾子が京都在住であり、裏千家の茶の湯に親しんでいたことが考えられる。

(120) 前掲「皇后宮へ御献茶の儀」六―七頁。なお、ルビは省略した。

(121) 表の番号17、昭和八年（一九三三）四月十七日に東伏見宮大妃が訪問したのは、石州流の一流派である雲州流宗家である。

(122) 表の番号16、昭和八年四月三日に久邇宮多嘉王一家が水無瀬宮を訪問したのは、久邇宮妃が水無瀬家出身という縁であろう。表の番号31、昭和十四年（一九三九）四月十六日に久邇宮大妃が東本願寺を訪問しているのは、娘の嫁ぎ先という縁であろう。

(123) 千宗室謹話「貞明皇后を偲び奉る」『茶道月報』昭和二十六年（一九五二）七月号、四頁。なお、引用文中の「町尻さん」とは、町尻子爵夫人鑑尾のことであろう。

(124) 「茶会近事」『茶道月報』昭和五年（一九三〇）十一月号、八一頁。なお、この茶会の報告は、「献茶奉仕記念」『茶道月報』昭和六年（一九三一）二月号、八七―八八頁に記載がある。

(125) ちなみに、大正十四年（一九二五）の中宮寺訪問において、高松宮宣仁親王は、「茶室に入らせたまふ事となりにぢり口に向はせられ畏くも

佩剣をおとり遊ばして御入席にな」り、濃茶薄茶とも喫している（『茶道月報』大正十五年（一九二六）一月号、九四頁）ように、茶の湯の正式の作法を行っている。亭主側にも十分な身分（この場合は門跡近衛尊覺尼である）があれば、皇族に対しても本来の茶の湯が実践できたことを示している。

(126) 前掲「皇后宮へ御献茶の儀」五頁。なお、ルビは省略した。

(127) その一方で、大正十五年（一九二六）のスウェーデン王国皇太子・同妃、昭和十二年（一九三七）のサラワク国王妃は、畳のうえに座っている。このことは、それが外国の賓客に対しても、正しい茶の湯のあり方であると当時の茶人たちが考えていたことを示している。なお、サラワクとは、現在のマレーシア・サラワク州に一八四一年から一九四六年まで存在したイギリス人の王国のことである。

(128) 千宗室（淡々斎）「茶道に就て」『風興集』昭和十一年（一九三六）、茶道月報出版部、二丁表。この文章については「昭和八年六月六日 JOOKより放送」とある。

(129) このとき使用された茶室の写真（「光栄のお茶室」『茶道月報』昭和八年（一九三三）一月号、口絵）によれば、「卓子と椅子」がおかれた部屋は、裏千家咄々斎写しの茶室に、裏千家寒雲亭のごとく書院が付属した八畳間である。すなわち、裏千家にもある広さの茶室である。このことから、裏千家訪問辞退の理由が、おそれ多すぎただけではないように思われる。

(130) 「閑院宮に御茶を献じて」『茶道月報』昭和八年一月号、三～四頁。

(131) 大資産家の職業別構成について、明治三十四年（一九〇一）、明治

四十四年（一九二一）、大正五年（一九一六）、昭和八年（一九三三）のデータを整理した資料がある。百分率で華族の占める割合を示すと、13.8%、11.8%、6.4%、2.4%と減少している。（「解題」前掲『大正昭和日本全国資産家地主資料集成I』一一頁における「第3表 大資産家の職業別構成」参照）

(132) 原武史「『国体』の視覚化―大正・昭和初期における天皇制の再編」『岩波講座天皇と王権を考える 第一〇巻 王を巡る視線』岩波書店、平成十四年（二〇〇二）、一三八頁。

(133) 原武史、同右論文、一三七頁。

(134) 原武史、同右論文、一三七頁。

(135) 原武史、同右論文、一三九頁。

(136) 原武史、同右論文、一四七頁。

(137) 六事例のうち、表の番号11、13、17、19の四事例がそれに該当する。

(138) 表からわかるとおり、昭和初期には男性皇族も茶席においては畳座するようになる。ただし、畳座するときには、本来は茶席では出さない大きな座布団を用いる場合（表の番号7、12、17、20など）があった。第二次世界大戦後の昭和二十八年（一九五三）二月二十七日、桂離宮において千宗室（淡々斎）が当時の皇太子明仁親王（現天皇）に献茶した際にも、大きな座布団を用いた畳座である（「茶室の皇太子さま」『淡交』昭和二十八年四月号、淡交社、口絵参照）。このように、「皇族への献茶」の初期などには、畳のうえに「卓子と椅子」がおかれたが、その後は、座布団を用いるものの、本来の茶の湯の畳座に近づくこととなった。

しかし、皇族が茶席に入る場合に「卓子と椅子」を用意する慣習は、のちに復活する。裏千家の東京宗家初釜式では、平成十年（一九九八）を契

機に座布団・畳座から「卓子と椅子」へと変化している。たとえば、その翌年の「東都の初春を寿ぐ―東京宗家初釜式―」『淡交』平成十一年（一九九九）三月号、口絵写真では、三笠宮崇仁親王、同妃、高円宮憲仁親王、同妃、近衛忠輝、甯子（もと内親王）夫妻およびその子近衛忠大が椅子座している。その一方で、在日各国大使、各省庁大臣等も参席しているが、すべて座布団なしの畳座である。ちなみに、そのなかには、のちに総理大臣となった小泉純一郎、鳩山由紀夫の姿もある。

畳座が当然となっていた皇族に対して、不必要なはずの「卓子と椅子」が復活していることは、実は別の意味をもっているのではないか。皇族に対する敬意は、その皇族と姻戚関係にある家元も、同様の身分であるということを知らしめることとなる。すなわち、「卓子と椅子」の存在は、かつては皇族と家元との身分差を示していたが、現在では家元と門弟との身分差を示す機能を果たしていると考えられる。

(139) 昭和十二年（一九三七）に文部省が編纂した『国体の本義』（内閣印刷局）では、「我が国に於ける一切の文化は国体の具現である」（同書、一一五頁）とのべ、つぎのとおり記述がある。

中世以来我が国の芸道は、先づ型に入つて修練し、至つて後に型を出るといふ修養方法を重んじた。それは個人の恣意を排し、先づ伝統に生き型に従ふことによつて、自ら道を得、而して後これを個性に従つて実現すべきことを教へたものである。これ我が国芸道修業の特色である。（同書、一二四頁）

さらに、茶の湯については、つぎのとおりである。

茶道に於て佗びを尊ぶのも、それを通じて我を忘れて道に合致しよ

うとする要求に出づる。狭い茶室に膝つき合せて一期一会を楽しみ、主客一味の喜びにひたり、かくして上下の者が相寄つて私なく差別なき和の境地に到るのである。この心は、古来種々の階級や職業のものが差別の裡に平等の和を致し、大いなる忘我奉公の精神を養つて来たことによく相応する。（同書、一二五頁）

(140) 川島宗敏「京城随行記」『茶道月報』昭和十三年（一九三八）十二月号、八九〜九〇頁。引用は九〇頁。本文後述の記念写真は同号口絵にある。

(141) 「全国五十万円以上資産家表」（大正五年（一九一六）時事新報社）では、前田利為の財産見込額は二千万円とあり、大名華族の第一位である（前掲『大正昭和日本全国資産家地主資料集成Ⅰ』六頁参照）。

(142) 前掲『新編元伯宗旦文書』五四二頁。

(143) 出仕先が加賀藩から伊予松山藩に変わったことについての理由は不明だが、『本阿弥行状記』には、つぎのとおり、千宗室（仙叟）になんらかの不幸事があつたことを伝えている。

仙叟宗室は加州君の御家人として在加賀被致、別して懇意にも候所、後願にて京都へ帰り、京住致され候。常叟宗室老は加州生れ也。京住の後、加州生れの若党不埒の事有之、仙叟手打に致され候事甚だむつかしく、加州の御掟にて、御連枝、家老中を始、手打に致度下人有之時は、太守へ一度御届之上ならでは、手打自由に致し候事、決して相成不申候処、仙叟此様子不案内にて、手打に被致候後に御届被申候に付、久々閉門御暇被下候。重き罪にも被仰付候事なれ共、元来茶道の御師範を被申上候事故、格別中納言殿にも気毒に被思召、浪人迄にて事相済申候由。茶道は殊之外巧者なりといへども、殊之外身持放埒に

て、親父より伝来の道具をも不残他へ譲られ、今は利休居士より伝来の物も無之候よし。別て末子といひ、旦翁の別て寵愛の事故、表よりも重代の茶道具も数品有けるとぞ。残念なる事也。(正木篤三『本阿弥行状記と光悦』中央公論美術出版、昭和四十年(一九六五)、九九頁)

(144) 井口海仙、前掲「今日庵の代々」八三〜九一頁参照。ただし、前注の内容が事実ならば、これは理解しにくいことである。また、近代には前田家との関係が途絶していたようであり、千宗室(淡々斎)は、湯浅七左衛門の尽力によって前田家との関係が復活した旨をのべている(「指心庵を悼む」『茶道月報』昭和十八年(一九四三)九月号、二八頁)。

(145) 酒井美意子、主婦と生活社、昭和五十七年(一九八二)、引用は一二三〜一三三、一三四、一三五、一三六頁。

(146) 「湯浅邸に於ける前田侯招待茶会」『茶道月報』昭和七年(一九三二)三月号、口絵写真。なお、明らかな欠字は補足した。

(147) その実兄である早川千吉郎(文久三年(一八六三)〜大正十一年(一九二二))は、大蔵省、日本銀行をへて、三井財閥に入り、最後は南満洲鉄道社長をつとめた人物であり、『東都茶会記』等に名前が散見されるように、「貴紳の茶の湯」においても重きをなした。

(148) 「前田利為侯をお迎へして」『茶道月報』昭和十六年(一九四一)一月号、三五頁。

(149) 「前田利建侯来庵」『茶道月報』昭和二十年(一九四五)十一月復活号、一六頁。

(150) 「仙叟宗室二百五十年忌大茶会記」『茶道月報』昭和二十三年

(一九四八) 六月号、一一頁。

(151) 竹子門「仙叟忌大茶会対談」『茶道月報』昭和二十三年六月号、二二頁。

(152) 柳宗悦「『茶』の病い」熊倉功夫編『柳宗悦茶道論集』岩波書店、昭和六十二年(一九八七)、八三頁。初出は『心』三卷三号〜五号、心編集委員会、昭和二十五年(一九五〇)。

なお、同趣旨の主張は、柳宗悦「法主と家元」『新小説』四卷八号、春陽堂、昭和二十四年(一九四九)にもみられる。

(153) 小林一三『新茶道』文藝春秋新社、昭和二十六年(一九五一)、一頁。なお、「終戦後の今日迄」とは、公職追放をさしている。

(154) 小林一三、前掲書、二三頁。なお、「(二三、一一、七)」(同書、二八頁)とあることから、執筆は昭和二十三年(一九四八)であろう。

(155) 香淳皇后の妹である久邇宮智子女王は東本願寺大谷光暢に嫁している。貞明皇后の姉妹である九条壽子および九条絳子はそれぞれ西本願寺大谷光瑞および大谷光明に嫁している。さらに、貞明皇后の兄九条道実の妻は東本願寺大谷光瑩の女である。これら以外にも、上級公家華族等との通婚事例は多い。

(156) 林屋辰三郎『歌舞伎以前』岩波書店、昭和二十九年(一九五四)、二四四〜二四五頁。

(157) 熊倉功夫、前掲『近代茶道史の研究』三三五頁。